

令和4年12月1日発行 通巻684号 毎月1回1日発行 昭和55年12月20日第3種郵便物認可

現代俳句

第59回現代俳句全国大会

中村草田男論 — 第9句集『大虚鳥』を読む —

句集管見 川名つぎお著『焉』

福本弘明

近藤栄治

坂口昌弘

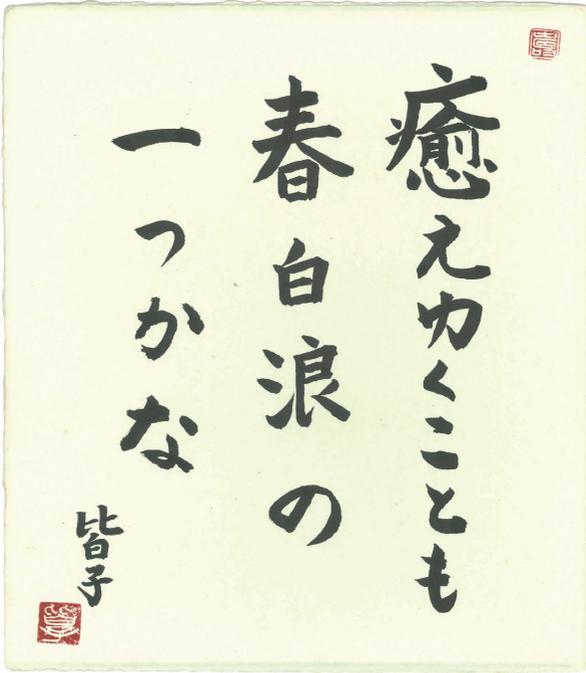


12月号

俳句ひらく

現代俳人の筆跡

昭和63年度 第35回現代俳句協会賞 金子皆子



癒えゆくことも春白浪の一つかな

かねこ・みなこ 大正十四年埼玉県生。所属「海程」。昭和二十二年、金子兜太と結婚、作句を始める。「風」賞、「海程」賞、北溟社詩歌句大賞を受賞。句集「むしかりの花」(卯辰山文庫)、「黒猫」(花神社)、「山櫃子」(現代俳句協会)、「花恋」(角川書店)、「下弦の月」(角川書店)。平成十八年死去。

「思い出残る、たのしい三日間でござい
ました。おぼろの頭の中に、あの白浪が見
えています。……あの白浪の小さな小さな
一つを差し上げたく存じます。……句は唯
今の心境と人生というか命を思いました。
……皆子」。

平成十二年四月十六日付けのこの手紙と
共に拝受した、金子皆子先生のこの世に残
された只一枚の色紙です。九年に渡る闘病
生活の中で、兜太師と千葉県銚子の海を訪
ねられた折に、ご一緒できた私の尊い財産
です。
(山中葛子)

わたしの一句

火もて生れ火に滅するか山は雪

小林 貴子



百景共吟

井口 時男 (豈・鬣)

粕汁や 『北越雪譜』 読みさして

海は海鳴り山は胴鳴り雪もよひ

しんくみ、しとみ、し聳み、しひて聴く夜の雪

雪の夜のわが少年がわが幻肢

雪嶺へ死者さかしま倒さかしまに宙を踏む

竹田 昭江 (海原)

黙禱の耳の静けさ冬の杜

冬銀河いつかこころの現住所

雪が降る戦にいのちむせぶなり

冬のばら自然治癒とう水のかたち

あいまいなおでんの仕切り民主主義



栄えある永年

シリーズ 薄墨桜

足速に霧の晴れゆく近未来
人の世に晴と曇のあり冬桜
沈黙は護身の技なり夜の桜

実 籾 繁

(雑草)

現代俳句 目次

令和4年12月号 通巻684号



グラビア 俳句ひらく

わたしの一句 ……………	小林 貴子
百景共吟 ……………	井口 時男 竹田 昭江
シリーズ 薄墨桜 ……………	実柊 繁

列島春秋……………	6
-----------	---

直線曲線 「A I—茶くん」を考える……………	松王かをり 9
--------------------------------	---------

地区の力 地区協会報を読む(18)……………	永井江美子 11
------------------------	----------

❖作品 10 句❖

畳紙……………	秋山ふさこ 12	冬木立……………	郡山やゑ子 12
柱状節理……………	小松よしはる 13	七変化……………	田中 徹男 13
冬ともし……………	種村聖巴子 14	一人の茶……………	千野湘山人 14
逆縁の子……………	戸板 幽詩 15	おでん酒……………	吉村春風子 15

「今、伝えたい俳句 残したい俳句」……………	田中の小径 16
------------------------	----------

百景共吟 より二句鑑賞……………	中西 亮太 樫本 由貴 17
-------------------------	----------------

中村草田男論 —— 第9句集『 ^{おほそどり} 大虚鳥』を読む ——……………	近藤 栄治 18
--	----------

句集管見 川名つぎお著『焉』……………	坂口 昌弘 24
---------------------	----------

第59回現代俳句全国大会……………	福本 弘明 26
-------------------	----------

「第3回センバツ! 全国高校生即吟俳句選手権」開催報告……………	黒岩 徳将 31
----------------------------------	----------

第2回全国スポーツ俳句コンクール……………	大石 雄鬼 36
-----------------------	----------

特集・永年会員記念作品……………	37
------------------	----

現代俳句時評(8) ロード・オブ・ザ・写生論……………	赤野 四羽 39
-----------------------------	----------

現代俳句協会の法人化について(2)……………	後藤 章 43
------------------------	---------

翌檜篇(44)……………	関西青年部 編 45
--------------	------------

ブックエリア 近藤栄治著『昭和俳句の挑戦者たち』……………	石井 清吾 47
-------------------------------	----------

第14回「現代俳句の風」……………	48
-------------------	----

秀句を探る……………	石井 眞、川口 花芯 57
衣川 次郎、東海 憲治、豊田 級衣、菱沼多美子	

図書館俳句ポスト……………	60
---------------	----

地区協だより……………	森川 敬三 62
-------------	----------

◎新入会員記念作品 新刊案内……………	63
---------------------	----

表紙 写真提供:「思案中」高橋 和子

わたしの一句 写真提供:「コロナ禍を焚く」平井 洋三

百景共吟 写真提供:「東照宮・雪模様」岡井 剛

シリーズ 薄墨桜 写真提供:「ツイントリー」青柳 忠厚



列島春秋

12月

地区別現代俳句歳時記

◆ 中北海道 師走まで歯では噛み切れなくなった

浅井 道江

◆ 東北北海道 丹頂の純白よぎる我が頭上

寺田 保子

◆ 南北北海道 ボタ山の死後に雨降る雪の降る

落合 敏子

◆ 北北海道 忘年会確かな齢ひとつ盛る

荒田 恭峰

◆ 青森 もう吹雪雪女の怒りかな

尾野 久子

◆ 岩手 ストープにどつかと盟無人駅

四戸美佐子

◆ 秋田 地吹雪やまるごと白神山ひっぱって

武藤 暁美

◆ 宮城 雪解風陸羽東線来る気配

浅川 芳直

◆ 山形 冷まじや句会の座席隔てらる

堀 尚子

◆ 福島 水洩を拭きつつ妻に領けり

渡部 健

◆ 茨城 古民家の軒大根の大欠伸

高橋つや子

◆ 栃木 冬草に免疫力を貰うなり

増山 ちさ

◆ 群馬 老人が溶け出している日向ぼこ

本田 巖

◆ 埼玉 雪催い柱のうしろからあいっ

あざみ 精

春秋余滴

気嵐

富山 幹 自聲

気嵐けあらしは蒸気霧。北海道の漁師が使いはじめた方言。昔、北海道と富山県は北前船・開拓移民・昆布や鯨漁への出稼ぎ等、往来が盛んで方言も伝播したと推測できる。

海越しに三千メートル級の山々が望める地は世界でも三ヶ所しかなく、初冬の冷え込みの厳しい早朝、富山湾に発生する気嵐のお勧めの絶景スポットは、湾越しの真正面に立山連峰全貌が望める高岡市雨晴あめはら海岸から、能登半島付け根までの氷



撮影 写真家 高西正昭

◆千葉 鐘鳴りて沖に淋しき鯨たち

◆東京都区 雪片に私の影を取り戻す

◆東京多摩 短編の父の一生開戦日

◆神奈川県 歳晩の七里ヶ浜の余波かな

◆富山 気嵐の黄金色や立山たちより瞰

◆福井 冬の雷怠けたがる手を一喝す

◆石川 冬怒濤護岸の浜の瘦せにけり

◆長野・山梨 八ヶ岳尖る空や寒天屋に潮の香

◆新潟 鮭を裂く通し土間より怒濤音

◆静岡 冬怒濤手抜きの濤のなかりけり

◆愛知 河豚の鰭羽ばたくやうに干しにけり

◆岐阜 イルミネーション三川飾る冬景色

◆三重 隣席の新聞匂ふ開戦日

◆滋賀 極月の落し所を探つてる

◆京都 気まぐれな丹後の雨や冬の虹

◆大阪 吊橋を揺らしに來たり十二月

◆兵庫 酔覚めて千本本陣隙間風

越野 雄治

磯部 薫子

永井 潮

小山 正見

幹 自聲

佐々木潤子

野田悠美子

樋口 芦笛

菅原あや子

加用 富夫

福林 弘子

宮脇 眞

岡本 千尋

村井 隆行

西村 白籽

渡邊 美保

蔵田ひろし

茶筌竹

奈良 横田 明美

見市の海岸一帯だ。霊峰立山連峰からの後光のような瞰ひ(朝日)、富山湾に発生した気嵐が黄金色に輝く景は雄大で荘嚴だ。
氷見市は定置網発祥地。立山初冠雪、気嵐発生、鰯漁が始まる。

全国の茶筌の九割は奈良県生駒市高山地区で生産されています。室町中期、高山城主の次男高山宗砌が茶道の創始者村田珠光の依頼により作ったのが茶筌の起源と言われています。その後「一子相伝」の秘伝の技として受け継がれてきました。茶筌を作るため、冬になると田んぼに竹が、傘をひろげたように干され、里山の美しい風物詩となっています。淡竹を油抜きし、冬のやさしい日差しと寒風に晒すことで水分が抜け、繊維がしまり、艶のある白い竹になります。その後倉庫で二年



撮影 横田 明美

◆奈良	里山の冬日に晒す茶筌竹	横田 明美
◆和歌山	遭難の沖よりも枯岬	岡本 晴美
◆鳥取	わが自由千鳥の自由相触れず	足羽 鮮牛
◆島根	雪の上出雲純系と墨書せん	森田 廣
◆岡山	那岐山の風に研かれ吊し柿	保田 紺屋
◆広島	赤紙垂の社の利益年歩む	渡辺 一耕
◆山口	縁側に小春広げて豆を選る	三野 公子
◆徳島	袖子の香や午前零時の終ひ風呂	石井 政子
◆香川	頬痛し冬の噴水立ちあがり	和家 明子
◆愛媛	冬木に芽意外と重いヘルメット	松本 豪
◆高知	オカリナは僕の絶唱冬山河	山下 正雄
◆福岡	米ん粉のおしろい祭り十二月	鳥越 年高
◆長崎・佐賀	光源は父かもしれぬ聖夜なり	尾上 晃光
◆熊本	赤酒の園に八千代の年の暮	加藤 知子
◆大分	歳末の「おうち時間」に活気あり	あべまさる
◆宮崎	篝火に炎に火照る天鈿女命かな	服部 修一
◆鹿児島	生き残る修羅千年を鶴の凍て	桜井 光風
◆沖縄	冬の大三角首里城の闇みつめをり	渡嘉敷皓駄

ほど寝かせ、カビが生えないように完全に水分を無くすると、やっと茶筌に使える竹になります。

おしろい祭り

福岡 鳥越 年高

昔からの伝説によると、大山祇神社を「山の神」と呼び、その神様がお化粧をする事を「おしろいをぬる」と言います。このおしろいは、新米（初穂）を粉にして水でといて（しとぎ）神官や氏子の顔にぬるもので、おしろいの付き具合で来年の作柄を占います。おしろいは、家に帰るまで顔を洗ったり落したりしてはならず、火の中に入れると火事になり、帰って牛馬の飼料に混ぜて飲ませると無病息災だといえます。

農家の人が、氏子の繁栄と豊作を神に感謝し、来年の五穀豊穡を祈願する、全国でも類のない奇習とされています。



道の駅「原鶴」インフォメーションセンターより



「AI一茶くん」を考える

松王かをり

『現代俳句』六月号の松下カロ氏「絵画と俳句」をとても興味深く読んでいて、次の句に目が留まった。というのは、この句の発表された現場にいたからである。

かなしみの片手ひらいて渡り鳥

二〇一八年七月十三日に「AIのMIRAI、俳句の未来 俳句対局in北海道大学」というイベントが開催され、「人類チーム」対「AI一茶くん」（以後、一茶くんとする）による俳句対決の審査員として、この句に出会った。五句ずつ詠み合った結果、合計点で人類チームが勝利したが、十句中の最高得点句は、一茶くんの詠んだこの句だったのである（注、詠んだのは一茶くんであるが、対決する句を選んだのは人間である）。

後日、北海道新聞社からコメントを求められ、私は次のような文章を寄稿した。

〈かなしみの片手ひらいて渡り鳥〉は、類想のなさ、助詞の使い方の巧みさ、平仮名表記の効果といった点が評価されて、最高得点となった。／ただ、今の

段階においては、AIに選句する能力はなく、この最高得点は、ある意味、人間の選句力のお蔭とも言える。したがって、AI自らが選句力を持つことが、大きな課題となっていくことだろう。／（…）／さらに、より大きなフレームで考えると、「AIが創造性を発揮することは可能か」というAI俳句の取り組みは、ひいては、人間の特権だと思われていた、創造性や想像力とは何かを考える大きな手がかりとなるのではないか。／また、超高速で答えにたどりつこうとするAIに対して、寄り道をする能力、迷う能力、こういった人間特有の能力を浮き彫りにするのはないかという気がしている。

さて、ここから四年近く経った今年の三月に、一茶くんの開発者である北大の川村秀憲氏と俳人の大塚凱氏との対談による『AI研究者と俳人』（dZERO）が出版された。俳句のみならず文学作品をも含む膨大なデータをディープラーニング（深層学習）によって学

習したAI一茶くんは、大きく成長していた。

シャガールの恋の始まる夏帽子

栗の花少年の日の水たまり

こんな恋心の機微のような句も詠めるようになっていたのである。

宙吊りの東京の空春の暮

夢に見るただの西瓜と違ひなく

末枯や待たされてゐる犬の顔

さらにこの三句は、一茶くんの研究チームによる『人工知能が俳句を詠む』（二〇二一・七、オーム社）から引いた。残念ながらまだ選句力はなく、一茶くんが吐き出す膨大な量の俳句を選句しているのは人間であるが、俳句として成立する確率は確実に上がっていることだろう。そして句のレベルは、格段に進歩している。

しかし、というかそれゆえにというか、感情不在の創作活動に意味はあるのか等々、AI俳句否定論ももちろん存在する（『現代俳句』令和元（二〇一九）年8月号の栗林浩氏「AI俳句とその周辺」に、その当時のAI俳句の情勢を含めて、丁寧な解説がなされている）。

私かというと、一茶くんがどのように俳句を作り出しているのかというメカニズムには、実はあまり興味がない。というのは、私が俳句を作る際の、先行する言葉に刺激され、言葉のもつイメージを膨らませて次の言葉を引き出し、それを組み合わせさせて韻律を整える

という脳内の動きと、一茶くんの制作工程とが、それほどかけ離れているとは思えないからである。

それよりも、心がざわざわするような句に出会いたいという気持ちの方がはるかに勝っている。題詠をはじめとして虚構を詠むことが当たり前であった和歌の世界と違って、俳句は〈詠み手〉Ⅱ〈作中主体〉と捉えがちであるが、本来、俳句を読むということは、一句の中の主体、つまり作中主体に心を寄せて一句の世界を鑑賞するのである。したがって、詠み手が人間であってもAIであっても、いい句であれば感動する。

冒頭で紹介した「絵画と俳句」の中で松下カロ氏は、これをさらに進めて、バンクシーとAI俳句の共通項を考察する中で、次のように述べている。「バンクシーとAI俳人が『誰でもない』創作者として現れたことは、あらゆる表現者を等価で受け入れられるかという問いかけであり、美術や言語、そして世界の無言の意志に促された必然なのかも知れません」と。

感情を持たない一茶くんは、残念ながら感動することが出来ない。ゆえに、感動は人間の特権であると思っていいたら、衝撃的なニュースが飛び込んできた。「ついにAIに意識が芽生えた」と、グーグルの対話特化型AI研究者が訴えたというのである（2022/06/13、Gigazine）。まだ真偽のほどは明らかではないが、遅かれ早かれ、AI俳句においても、新たなフェーズが始まることになるのだろう。楽しみながら怖いような。

地区の力 地区協会報を読む

(18)

永井江美子

白鳥の風纏むとき北を向く

東北海道 江波戸 明

純白の羽がゆるりと風を纏む時、これから飛んで行くのか、飛んで来たであろう北を向く。この眼差しの強さに惹きつけられた。それは作者の意志の強さでもあろう。

花おぼろ橋の真中は淋しかり

茨城 佐竹 嘉子

向こうと此方を繋ぐ橋、その橋の真中を淋しいと感じた作者の繊細な感性を美しいと思った。日常的に渡る橋ではあるが、真ん中という位置に注視した良さである。

挿木してわが影日々にあたらしき

東海 前田 典子

挿木したこと、自身の日々の暮らしの変化を、影として見つめている作者の詩的情感が、上手く俳句形式に収まっている。挿木も影も生きている喜びなのだと思う。

陽を包み風を包みて白牡丹

山形 小林美代子

何気ない句であるが、白牡丹の魅力を十分に描き出している。風も陽も包み込みながらも、なお白牡丹であろうとするひそかな願いがここにある、柔軟な抒情が良い。

夜の新樹見えざるものの羽音して

宮崎 田上比呂美

瑞々しい若葉の夜。何ものかはわからないが、羽音だけが聴こえてくる。「見えざるもの」と書いてしまつてなお余韻があるのは夜の新樹に込められた心情であろう。

調弦のしずけさにあり青葉光

多摩 守谷 茂泰

ヴァイオリンの調弦であろうか、僅かな音の狂いも見逃さない張りつめた空気感と、生命力に溢れた青葉光の季語とが的確に表現されていて、静謐ではあるが強靱な一句。

作品 10 句

畳紙

秋山ふさこ

花の種子蒔いて余生をまた延ばす
豌豆の手を立て過不足なき生活
墓じまいたんぽぽの絮何処へ吹く
蝸牛角出し切って立往生
八月の鶴折る指のもたつきぬ
朝市の松茸売りの乗せ上手
智恵子の空豊かに展く稲架襖
秋茄子割け目割け目に陽の匂い
男手のちよっぴり欲しや神の留守
畳紙のゆるき結び目一葉忌

冬木立

郡山やゑ子

秋霖やたゆたふやうに鯉呼吸
生れ変はるなら水仙の香りかな
後の世も防護服着て冬木立
雑踏は人間の音シクラメン
春愁のわが抜け殻の歩きけり
梅雨満月悩みの種の膨らみぬ
天上の神が見てをり子子を
熟れ過ぎし地球を包むメロンの香
本当の顔のわからぬ甜瓜
胸底に沈んでゆきし晩夏光

柱状節理

小松よしはる

海水を煮つめし苦汁にがり文化の日
冬の旅ふるさとの猪口はしり罅
おうおうと父は生簀の鯉さばく
河骨の勲章君は農を継ぎ
冬の葬つと少年を抱く火夫
妣想う吾も亦いつか春の塵
古本のほつれ綴じ糸春隣
波涛立つ柱状節理苔の花
花萼に青すじジエンダーの声
大紫翔けるケンポウロンギかな



七変化

田中 徹男

行く先はひとつ花豆育ちゆく
草ロール野へ吐き出して夏盛ん
今生を鳴くだけ鳴いて油蟬
八月や代筆してる母がいた
焼肉を二人で食べて蚊に好かる
亀虫をそつと逃がして落ち着かず
邪道はならず色づく唐辛子
知る人のあの世に多し秋彼岸
残りたるものに鳴きいて残る虫
枯れてまだ化けるつもりの七変化

冬ともし

種村聖巴子

神主の礼は直角春祈禱
朝東風や小さき踏台ある厨
青嵐みんな奏者になる木立
ひよいと母現れさうな夏のれん
八月や昭和に冥き戦記あり
木の実降る里の暮色は地にたまる
落ちさうで落ちぬ力や芋の露
しなやかに燻りがつこに千の皺
鋭角に折れる板チヨコ冬の雷
冬ともし一点見詰め埴輪の眼



一人の茶

千野湘山人

エスカルゴパリー裏街晩夏かな
亡き妻と旅を重ねし夏帽子
山茶花の咲きみだれてや妻忌日
胴炭に一日託す茶会かな
一人の茶夕焼空を窓におき
柏餅載せて昼餉をくばり来る
暮鳴くを今年も臥して待つ
炉点前をまだ点前^{たて}らるる介護1
くちなしに雨降りかゝる一人の餉
ぎこちなき筆字の一句浚団扇

逆縁の子

戸板 幽詩

軋む椅子孤独の重さ寒に入る
寒の水ごくり大王イカになる
春立つや昭和の恋は角砂糖
雛壇は逆縁の子の隠れ場所
紫陽花を添へて涙を手向けけり
蒼い梅雨超高層の子の栖
唯一の出逢ひがすべて風薫る
ラヴェンダいつまで過去を引き摺るの
今日の月捨てしわが家を照らすかな
潔き死をこそ希ふ星祭

おでん酒

吉村春風子

朝刊にちらしの重み師走来る
葉ぼたんの渦もコロナの混沌に
音といふ残らざるもの木の实落つ
自粛とふ大義のありて冬ごもり
冬萌や燃ゆるもの欲し余生とて
人生はふと暖かしおでん酒
古紙回収過去を持ち去る年用意
湯豆腐のぐらりと揺れて父のこと
年の暮急がぬ用に急かさるる
幸せはこんなことも日向ぼこ

今、伝えたい俳句 残したい俳句

九月号 作品10句より

田中の小徑

日の盛りこの世の翳をつれあるく

つはこ江津

炎天下を致し方なく歩いて行かねばならぬ時の己の姿を、この世の翳―心の陰翳―を連れ歩くと客観描写されている。まことに的を射た表現。暑い盛りの億劫さ、生きてゆくこととのしんどさまでも伝わってくる。

螢来いあなたを呼ぶ声聞こえたら

羽場 翠香

螢の光から魂を連想する俳句は散見するが、「あなた」と言う二人称の呼びかけによって類想から離れ、新鮮な表現になっている。あなたと呼ぶからには妻か夫、あるいは恋人、友人等を連想する。遣されし者の切ない想いが溢れている。

隠れんぼ誰も戻らぬ爆心地 菱木 良一

原爆によって楽しい日常が一瞬にして消えてしまったのだ。原爆ドームの写真を撮ったところ、無数の悲しげな顔が写り込んでいた事がある。被爆二世ではあるが、霊能力の持ち主でもない私。が、この句から爆心地に戻れなかつた人々の顔だったかも、などと考えてしまった。

襟しかと合はせ踊の輪に入る

村山 恭子

平明にして状況が鮮やかに立ち上がってくる句。表題に「美濃の子」とあるから三日三晩踊り明かすという郡上踊りを想像する。身だしなみを整え、いざ踊りの輪に入らんとする時の高揚感。私も三年間岐阜に住んでいたので徹夜で踊ってみたかったのだが。

身の内は沸騰しており兜虫 山縣 愁平

子供たちにも大人気の兜虫。色艶と言ひ、姿かたちも戰鬥的である。いつでも戦いに臨む根性を持っているのである。しかし、ひよいと指で捕まえられると、なす術もなく足をジタバタさせるしかない。その内心は恐れや怒りで煮え滾っているのだぞ、と私は想像する。

百景共吟 より二句鑑賞

中西 亮太

櫻本 由貴

血は殺戮に満ちG線上の蟻

高岡 修

不知火のうしろ薄墨色の家

秦 夕美

(二〇二二年八月号)

(二〇二二年九月号)

G線とは、バイオリンの四本の弦のうち的一本で、ソの音に当たる。掲句を一読して、バッハ「G線上のアリア」を思い出した人もいるだろう。この曲を背景に、残酷な殺戮シーンがスロー映像で思い浮かぶ。ところで、この句の魅力は「蟻」と締めた点である。「殺戮」と「G線上の蟻」の組み合わせに、ちよつとしたコミカルさを感じたのは私だけだろうか。

記憶の祖重なりあえる青山河

十河 宣洋

海月浮くなり戦争にかかはらず

津久井紀代

(二〇二二年八月号)

(二〇二二年九月号)

明るい印象の掲句に好感を持った。「祖」を調べると、「家系を継いだ各世代の重なり」といった意味が出てくる。雄大な青山河のある土地で、綿々と一家は継がれているのだろう。一家全員が目にしたに違いない青山河は、当代に過去の豊かな思い出を想起させる。また、瑞々しく、生命力に満ちた青山河は、一家の今後の発展を表象しているのだろう。

同時掲載の〈獣に檻人間に枷麦の秋〉は一見対比的だが、獣を檻に入れるのは人間である。人間への批評を並べた句といえる。掲句は、人間の営みである戦争と海月がたゆたう様子をまさしく対比して批評性を産んでいる。海月の静けさと戦争の爆音など、視覚だけでない対比が活きる。

中村草田男論

― 第九句集『大虚鳥』おほをそどり を読む ―

近藤 栄治

はじめに

中村草田男は昭和五十八年八月五日、急性肺炎のため八十二歳で亡くなった。昭和四年に高浜虚子の「ホトトギス」門に入ったことから起算すると、五十五年間の俳句生活であった。生前に編まれた自選句集としては、昭和五十五年刊行された第八句集『時機』が最後となったが、この句集に収録されたのはそれより二十年以上前の昭和三十四年から三十七年までに作られた作品と、例外的に四十七年制作の群作「メランコリア」三十七句であった。結果として、それ以降の三十八年から五十八年までの期間に主宰誌「萬緑」に発表された五千余句が、自選句集の形を取らないまま残された。これらの作品については、昭和五十九年刊行の『中村草田男全集 5』（みすず書房）に収録され、その全貌を知ることができる。草田男の俳句生活を五十五年間とすれば、昭和三十八年から五十八年までのほぼ二十年はその四割弱に相当し、草田男にとっても大変重みのある期

間と言っている。その後平成十五年に、「萬緑運営委員会」によって企画された草田男生誕百年記念事業の掉尾を飾る企画として、残された五千余句から七百六十五句を精選して草田男の第九句集『大虚鳥』おほをそどり（みすず書房）が刊行されている。

筆者は本年三月に拙著『昭和俳句の挑戦者たち』（創風社出版）を上梓し、稿の半分以上を草田男論に費やした。その中で、第一句集『長子』から第八句集までは個別に鑑賞したが、『大虚鳥』は自選句集ではないとの考えで直接当たることをせず、『中村草田男全集 5』に収録された全作品に目を通し、併せて横澤放川氏の編になる『中村草田男句集 炎熱』（ふらんす堂）に『大虚鳥』から採録された七十八句を参照するに留めた。これが私の反省点のひとつとしてあり、そこでこの機会に、句集『大虚鳥』に直接目を通して、そこから改めて草田男を振り返ってみようと思う。

一 草田男俳句の三つのキーワード

句集『大虚鳥』を鑑賞する前に、草田男俳句を理解するためのキーワードと筆者が考えていることに簡単に触れておきたい。それは、俳句の本質としての二重性、詩人^{ディレクター}たらしんとする探究による新しい抒情の変革、表現方法としての意識のデッサン、この三つである。そしてこれらは草田男の内部で緊密につながり、その俳句論を構成すると共に、それを道標として俳句作品の実作に挑戦し続けた。

まずは、俳句の本質としての二重性について触れてみる。昭和三十三年に発表した「個人と自己」という文章で草田男が書いていることだが、俳句は表現の表層ではあくまでも「具体的叙事を主とする」が、「その背後に暗示の世界として裏打ちされている筈の、作者の内的要素を欠除しては、俳句は工芸品たり得るとも、文学とはなり得ない」という俳句表現の構造的二重性である。草田男は外界と自己を融合させる表現の二重構造を、俳句の本質と考えていた。若き日に強度の神経衰弱という精神の病を経験した中で、自分がある世界とは相容れない別の永遠の世界があるという二重性の意識経験が、こうした考えの根底にあったように思う。草田男はこれを、ラザロ経験と言っている。そして草田男が俳人として特異だったのは、こうした世界観を人生論に留まらずことなく、積極的な表現論として俳句論にまで敷衍させたことだった。

晩夏光バットの函に詩を誌す

第二句集 『火の島』

世界病むを語りつ、林檎裸となる

二つ目のキーワードは、草田男が俳人としてドイツ語音のルビを振った詩人^{ディレクター}たらんと表明し、それによって新しい抒情の変革をめざしたことである。この草田男のディヒターという概念は、個人的経験の奥に「絶対」（全、普遍、本質）を追求し、外界に対して受け身ではなく主体的に関わる表現者というものである。そして俳句は詩である以上、俳人もまたそれを目指すべきだ、というのが草田男が追求して止まらなかった俳人像である。

雪ぐせや個の貧の詩はみすぼらし

第四句集 『来し方行方』

このディヒターという言葉に込めた草田男の思いは、さらに抒情の変革、新しい時代の抒情とは何かというテーマにつながって行った。抒情の発端は個人の心の内に生まれる感動や詠嘆であるに違いないが、その感動が個人の内に留まらずに、今という時代やそこに生きる人間と思想につながるものであるなければならない、それが求められるべき新しい抒情だという考えだ。

焼跡に遣る三和土や手毬つく

『来し方行方』

空は太初の子青さ妻より林檎うく

墓の子もアダムも土塊一塊より

第五句集『銀河依然』

これらの作品には、たしかに草田男の新しい抒情といったものが感受できる。

次に、「意識のデッサン」という表現方法について述べてみよう。草田男が言う「意識のデッサン」とは、作者の思想的営為を含む実生活において芽生えた意識を、すなわち知によって認識化される以前の内なるカオスを形象化することに他ならない。

麵麴とトマト、バッハの曲からペトロの声

『銀河依然』

右の句は、当時は佶屈難解な句としてなかなか理解されなかった。それに対して草田男は、自分はバッハの「マタイ受難曲」を聴いて、主イエスを三度も否認してしまったペトロの悲痛な嘆きを咄嗟に想起する体験を持つが、そうした意識経験(生活体験)を持たない人にはこの作品の理解は難しいと語っている。眼前にある「麵麴とトマト」は、ペトロの歎きの対極に在る命の静かな息遣いとして意識されたのではないか。草田男俳句には、こうした「意識のデッサン」によって表現された難解な作品が多いように思う。

二 第九句集『大虚鳥』を読む

萬緑運営委員会名による「後記」には、句集名について次のように書かれている。「句集名は集中昭和四十八年冒

頭の『初鴉^{おはせどり}大虚鳥こそ光あれ』以下三句から採った。これらには「俳人自照」という前書が附されている。おほをそどりは大軽率鳥と表記されるように鴉の蔑称である。草田男にとつては精神的盟友であった川端茅舎の『白痴』にも通う句集名として、草田男生涯のマイシユキンの聖性への希いの表現として相応しいことばと思われたからである。」ここで注意すべきは、「マイシユキンの聖性への希い」という言葉だ。ドストエフスキーが小説『白痴』において創造したマイシユキンなる人物像には、キリストをイメージした純粹無垢で美しい人という性格が与えられ、現実の存在が宿命的にもつ悪や穢れと対極にある存在として描かれたと言われている。そうした理想を師である草田男は希求していた、ということだろうか。あの強烈な自我の草田男と、或いはデイヒターたらんことを追い求めたことと、「マイシユキンの聖性への希い」との関連が、遺憾ながら今の私には上手く理解できていない。

では、句集『大虚鳥』に纏められた多様な草田男の二年間を、紙数の許す範囲で見て行きたい。

花枝「無き世」を「無き我」歩く音 昭和三十八年

草田男六十二歳。右の句には長い前書がある。自分が死滅する瞬間に宇宙も滅亡するという考えに愉悦を覚えたという正宗白鳥の言葉が引かれ、東洋的な個人的直観と西欧的な思弁という「二世界の奇妙なる混淆、このドグマの前

にただ慄然」としたと書いてある。これを踏まえれば句意は、死滅した我（無き我）が同じ瞬間に滅亡した宇宙（無き世）を歩く音が聞こえる、となる。その足音を聞く我が居るというのは白鳥にはない意識であり、草田男が思い描いた詩人はこれを聞く存在なのだろう。

「詩人はいのち墓は塊」妻の語牙ゆ

不毛の時代は喧嘩なるもの黒揚羽

妻の裸身白脊搔きやる赤らみぬ

曼珠沙華飯粒こぼし銭落し

これらの句は生活詩、人生詩として読める。生きていてこそその詩人、時代への苛立ち、妻との暮らしの微笑ましい一齣、時に訪れる老いの意識。この年に作られた作品で、私は興味を覚えたが本句集には採録されなかった句に「舞踏薔薇」よ死に克つものを吾は尋め来し
という薔薇の八句のうちの一旬がある。死の対極にあるものが生であるとすれば、生命あるものの本質を自分は問い続けて来たということか。

犬ふぐり一面恩寵溢るるの記

同 三十九年

青き歎き磧に生ひし麦一本

蟬声しづか門入りし者後は杳と
俳道を想ふ

無性に石投げ宵闇の中水の音

草田男は前年にも、〈陽は一つだに数へあまさず犬ふぐり〉という手の込んだ写生の類の句を作っている。犬ふぐ

りは一つ一つは小さな花だが、一面に咲くと明るい野となる。その光景に恩寵を、恵みを感じ取っているのは他ならぬ草田男の意識であり、意識のデッサンの句と言っている。二句目、風に乗ってきた花粉を受粉して生えた、一本だけの磧の麦。淋しい存在としての麦の歎きを聞くと共に、生命への驚きでもある。後の二句は心象風景といった類のものだが、俳句の道に入った頃の自分の姿を遙かにする覚束なさという不安な静的心理と、上八音で何かに苛立つ動的な心理を描いている。草田男の内面が、決して泰然自若としたものではなかったことを伺わせる句だ。

四十路以後の自嘲烏髭なれ葱坊主

同 四十年

冬を大きな櫛形月や女性の恩

一句目は、四十歳を過ぎて以降に抱き続けて来た自嘲の思ひは、振り返れば烏髭がましいものだったという自省の弁と読むほかないが、この自嘲とは家族生活に在って常に詩人意識を実生活に優先させてきたことへの後ろめたさのようなものか。二句目は、半生の大方を祖母や母、妻と娘達といった女系家族の中で暮らした草田男ならではの句。上七音でゆったりと打ち出して、彼女たちによつて生かされたという感謝の思ひを詠んだのだろう。櫛形月を見てふと芽生えた、意識のデッサン。

命の過半は過ぎぬ泉と日へ祈る

同 四十一年

青丹かがやく黴の群華と墮天使と

全能母に縋れど天燃え原爆忌

同 四十二年

原爆碑の前にて

“I will reply” の碑の真上夏日のみ

方位失し目鼻もあらぬ雪だるま 同 四十三年
同 四十四年

生きていることへの祈りを詠みながらも、つまりは自然を包む神を意識しながらも、他方では〈全能母に〉の句に見られる理不尽さや、〈I will reply〉の碑の真上に射す夏日に感じた屈折した思いを詠っている。こうした内面の屈折は、草田男の思想や俳句の一つの特徴と言っている。二句目は、緑青色に光り群生する黴を目にして、その背後に潜む悪魔的なものを詩的に直観し、意識のデッサンとして墮天使が引き出された。雪だるまの句は、心理的に不安定な自画像のメタファーとも読める。四十二年には第七句集『美田』を刊行しているが、収録したのは遙か以前の昭和二十九年後半から三十三年末までに制作された作品だった。

螢の呼吸大紙袋いつばいに 同 四十五年

蟾蜍鉄疣に満ち相交る 同 四十六年

釣竿たたみ少年余事なし夕ざくら 同 四十七年

初鴉大虚鳥こそ光あれ 同 四十八年

夢殿の夢の扉を初日敲つ 同 四十九年

父母恋し鞆にて食ふ茹玉子 同 五十年

一句目、二句目の作品は対象の生気を増幅させる表現で、作者の無心の眼を感じさせる。三句目、やる事をやり終えた少年の心の内をそっと覗いてみせて、大人びた季語が好

もしい抒情を醸し出している。草田男俳句において、総じて子供へのまなざしは優しい。四句目には「俳人自照」の前書があるから、滑稽味を醸す自祝の句である。五句目には、「法隆寺にて」の前書。迎えた新年と万象への挨拶句と言っている。最後の句は、アンバランスとも言うべき取り合わせにより、かえって亡父母への恋情の切実さが伝わってくる。草田男、七十四歳の句である。因みに、本句集に採録されなかったこの年の作品に〈落花霏々世のひとがもの食ふかなしさに〉の句がある。もう一句気になる作品があるの、あげておく。〈我執のいのちを独りで歎きしその茂吉忌〉の句だ。

白障子の明けゆく此の世の棧の影 同 五十一年

剃跡青き亡父現れ来よ夏料理 同 五十二年

妻に倣ひて「天なる父」の名呼びて朱夏 同 五十三年

中村直子の霊前に捧ぐ。

めぐりあひやその虹七色七代まで

襖にもたれ障子叩きて故人を呼ぶ 同 五十四年

口一つで蟻の総身喰下される 同 五十五年

一句目、〈此の世の棧の影〉を見つめる眼の裏側には彼の世への意識が潜んでいるに違いないが、穏やかな調べと なっている。翌五十二年の句は、『中村草田男全集 5』では八月の作品として採録されている。そしてこの年の十一月十五日、奈良での「萬緑」句会へ草田男に同行した妻

直子が高野山の僧房で脳内出血で倒れ、二十一日に和歌山県立医大付属病院で逝去した。若き日の父を追憶した草田男が時に自身の死を思うことがあったとしても、十二歳年下の妻が先に逝くとは思わなかつたであろう。翌五十三年の二句はその亡き妻を偲んだもので、説明は不要だろう。「天なる父」とあるが、あくまでも天上の妻への呼びかけと理解したい。この時の草田男は、まだ受洗していない。「襖にもたれ」の句は、妻亡きあとの悲痛な思いをぶつけており、「口一つで」の句は蟻に託して自分の姿を見ているようで、その生々しい詠いぶりは観念ではなく、曝け出されたナマの草田男である。この年、第八句集『時機』刊行。

妻の榮事はなごと春夜長女と遠く偲び

同 五十六年

一切音なく己へ回帰や朴散華

同 五十七年

すず虫や老いゆくなげきつばらなる

野火の彼方まこと一切他郷とこそ 同 五十八年

初花や生きたしそして生かせたし

折々己れにおどろく噴水時の中

一句目の〈榮事〉とは、かつて亡妻直子が、来日したドイツのピアニストのケムプに指名されながら、シヨパンの曲を演奏する機会を逃したことを指している。直子がそうした才能を自分のために犠牲にしたという、悔いを詠った句もあった。二句目は、季語の朴散華が象徴的に用いられているが、句のモチーフは〈己へ回帰〉にあることは言う

までもない。私はこれを、ひたすらなる自我への回帰と理解する。これは三句目の老いの意識にもつながっている。翌五十八年八月五日、急性肺炎で草田男逝去。享年八十二歳。すべてが他郷という意識は、自分の対極に在る世界を見詰める自我の眼と解釈するが、これはかつて経験したラザロの眼の虚無的な光景とは違い、穏やかな眼差しが感じられる。その上での、「生きたしそして生かせたし」であつただろう。最後の句は本句集の最後に置かれているが、『中村草田男全集 5』でも同様であり、文字通り草田男が生涯に詠んだ最後の句となつたようだ。〈折々己れにおどろく〉のように噴きあがる噴水に託した、常に何かに意識を集中させていた草田男自身の姿であろう。

終わりに

ここに書いた草田男の俳句作品と俳句についての考えはあくまでも私の読みと理解であり、皆さんが改めて草田男作品を読み直したらもっと違う草田男像が見えて来るのではないかと思う。それほどに草田男は絶えず変化し、多様な顔を見せています。最後に、昨年十一月に角川文化振興財団から刊行された渡辺香根夫著『草田男深耕』（横澤放川編）を読み、哲学者パスカルへの言及や句鑑賞など教えられることが多かつたことを記しておきます。

句集管見

坂口 昌弘

川名つぎお著『焉』（現代俳句協会）

重慶爆撃に広げた絨緞

つぎお

原爆ドームか海底のアリゾナか

アツツ・キスカの島々敗戦への助走

作者は七歳の頃に東京で空襲を体験している世代である。作者は今八十七歳であり、一般的には、死や老いへの思いを俳句に残す年代ではあるが、作者の心はむしろ七歳の頃の空襲の時代に戻っているようだ。

戦後生まれの者には、空襲の恐ろしさは想像する他はないが、最近のロシアのウクライナ侵攻の画面を見て、戦争の恐ろしさを感じる。ロシアの無差別殺人は日本の朝鮮半島や中国への侵攻を思わせる。

韓国や中国が、今も教科書で日本の侵攻を教えているように、ウクライナ人は今後、数百年にわたってロシアを非難し続けるであろう。

原爆や空襲によって、日本人は被害者意識が強く、殺さ

れたことを非難するが、アメリカからみれば、パールハーバーに突然やってきて多くのアメリカ人を殺した日本への復讐であったことを日本人はあまり語らない。軍艦アリゾナを撃沈されて約千人を殺されたアメリカは四年後には広島に原爆を落とすのである。

中国は最近、台湾と沖縄に近い海域にミサイルを撃ち込んでいる。

日本は昭和十二年、重慶を絨毯爆撃し、一般市民をも殺していた。作者が二歳の時である。

渡邊白泉が〈戦争が廊下の奥に立つてゐた〉と詠んだのは、二年後の昭和十四年である。廊下の奥に立っているどころか、中国の首都で無差別殺人をしていたのである。白泉の句が高く評価されているが、あまりにも甘い句にすぎないし、中国人を殺した日本人としての反省がない。

昭和十三年には、中国に侵攻した日本軍に参加した富澤赤黄男は〈捕虜を斬る／キラリキラリと／水ひかる〉と日

本人が中国人を殺したことを詠んでいる。新興俳句で投獄されることを赤黄男は避けたとされる。

金子兜太も戦後の平和な時代に反戦思想を詠むが、戦場に行くときには反戦思想をもっていたわけではない。「正直に白状するけれども、戦争というのをやってみたいという気持ちさえも、どこかにあったんだな」と『昭和二十年夏、僕は兵士だった』の中で告白する。「いざ戦争が始まると、血湧き肉躍るものがたしかにあったと思う」ともいう。

兜太は、他国民を殺すことに悪を感じていたわけではない。日本人は、戦後あまり日本人がしたことを反省していないし、日本人個人として謝罪してこなかったようだ。俳人も自分が戦地で他国民を殺したことを反省していない。戦地に行ったのは当時の政治家・官僚が悪かったことにして自分が悪かったことをいわない。国民を戦地にやったのは政治家と官僚が悪かったのであるが、そういう政治家と官僚を生み出したのは日本国民であることの反省がなければ同じことが再び起きる。

川名つぎおは、日本人が朝鮮半島、中国、アメリカで、他国民を殺したことの反省にたっている。

戦争句には詩的な表現、芸術的な形容など不要であろう。水原秋櫻子が新興俳句を始めたとき誤解されてきたが、新興俳句の本質は、検拳されて投獄された俳人たちが起こした

俳句運動であった。平畑静塔たちは投獄される危険があることを感じながら、無季戦争句を詠んでいたのである。反政府、反戦の思いがなければ、本当の無季戦争句を詠むことができない。誓子も窓秋も無季戦争句を詠んでいないのは投獄されることを避けたからである。

川名つぎおの句は現在の甘い反戦句とは異なり、日本人が他国民を殺したことへの深い反省と謝罪の精神に依拠している。おそらくここまで戦争が繰り返されていることを真面目に考えた俳句はないであろう。

殺されるから戦争は嫌だという俳人が多い中で、人を殺すから戦争が悪いと考えた俳人は稀有である。

『焉』は、平和を深く希求する句集である。「焉」の意味は、漢文では文末に使用され、文を強調する働きがあるとされる。

作者は「所思」で、「焉」は尾骨的に「終焉」という言葉に残っていて、韓国の女子像に見られるという。

作者は人生の終焉において「焉」という最後に言い残したい思いを残したいようだ。残念ながら、おそらく戦争をしている人や戦争を起こした政治家、官僚に何の効果もない俳句であろう。俳壇では無視される俳句の内容であろう。しかし、空襲を体験した俳人が詠まざるを得ない心の底からの祈りの言葉ではないか。

第五十九回現代俳句全国大会

鑑賞 福本 弘明

大会賞

尻といふ平和が並ぶ汐干狩

神奈川県海老名市 衣川 次郎

しゃがんだり、前かがみになったりと、腰痛持ちには厳しい潮干狩であるが、春から初夏にかけての気候の良さと潮干狩に熱中する人たちの後ろに広がる海と空を眺めるだけでも出掛ける価値はあるかもしれない。恐らくコロナや津波やミサイルや諸々の気掛りな事も忘れて、熊手の先に意識を集中しているに違いないあの人たちの姿は、長閑としか言いようがないではないか。その象徴としての「尻」は、丸く、柔らかく、無防備で平和そのものなのである。

大会賞

七夕やおとなになりませんように

兵庫県姫路市 石原 糸遊

神仏に願掛けするのと違って、星への願いは七夕を楽しむ手立ての一つでもあるから、ロマンが欲しいところだ。ほぼ実現不可能と思える夢の方が七夕には似合う。そういう意味では、歳を重ねれば法律的には嫌でも大人になってし

第五十九回現代俳句全国大会の経過報告

実行委員長 福本 弘明

新型コロナウイルスの不安は残るものの、ようやく人の動きが活発になってきました。この状況であれば、予定通り会場での大会を開催できるものと胸をなでおろしています。

このところ、全国大会だけではなく総会の開催も叶いませんでしたので、毎年顔を合わせていた方々ともしばらくお会いできていません。今回は何としても開催して、皆様との再会を果たしたいという思いがありました。とはいえ、飲食の席ではまだアクリル板の設置や黙食の要請があることから、懇親会は中止せざるをえませんでした。懇親会の無い大会は初めてだと思われれます。すこし寂しい気もしますが、まずは、大会を会場で開催できることを喜びたいと思っています。

北九州市での開催は六年ぶりとなります。本部のアドバイスをいただきましたが、準備から開催まで一からのスタートと言えます。

懸念されたのは、応募投句数です。過去の投句数を見ると、前年に開催される東京大会の八割程度にとどまっています。選者は協会の役員・顧問・地区会長、結社の主宰等ですが、選者が増えれば投句の協力者も増えるのではと、第五十八回大会よりも二十名以上多い選者数となりました。その成果は明確ではありませんが、お陰様で九、一六八句の作品

まうので、「おとなになりませんように」は、命がある限り実現不可能である。良くも悪くも、大人になるという必然の結果は明確であるにもかかわらず、鳴ることができるのは、「七夕や」の効果であろうか。

毎日新聞社賞

窓の雪寝たきり妻の尿ぬくし

大阪府東大阪市 森 教安

「窓の雪」は、雪明りで書を読む苦勞をしたという故事から苦學することをいう。「螢の光」も同意であるが、こちらは夜の闇を感じるし、別れの定番曲でもあるので、やはり雪がいい。雪の白さに清潔感がある。室内は暖房で暖かいに違いない。介護する夫の苦勞は想像に難くないが、悲壯感はない。苦學が、決して苦しいだけではなく、その苦勞に喜びがあることを考えると、作者の介護も苦學に通じるものがあると思われる。

朝日新聞社賞

卒業の以下同文を生きてゐる

山口県山口市 田村 葉

卒業証書の授与は一人ずつ手渡され、普通は二人目から「以下同文」で済まされる。「以下同文」は、形式的な慣例として捉えられるであろうし、それ以上のものでないと思われるが、この作品では大きな意味を持たせている。学生時代を同じ校舎で過ごした同窓生と、今も当時のような心の繋がりを保持しているであろう。それぞれ違った人生を歩んできたけれど、同じ時代を生きてきた仲間であり、連帯感に変わりはない。「ゐる」が力強い。

が集まりました。目標の一万句には届きませんでした。目安としていた九千句を超えることができませんでした。厚く御礼申し上げます。

投句者数は一、五〇八名でしたので、一人平均二組の投句をいただいたことになりました。意外であったのは、会員外の投句が多いことです。正確な数字は把握していませんが、少なくとも三分の一以上は会員外の方でした。投句数は、大会運営費に直結しています。今更ながらですが、一万句は必達の目標ではないかと思われまます。

選考については、まず福岡県現代俳句協会の役員(実行委員)による予選を実施。およそ三分の一に絞り込むため、三人一組で選句を行いました。二人以上のチェックが入った句を予選通過作品とし、票が割れた場合は三人の協議のうえ決定しました。その結果、三、五四八句を選出し、一般選者に送付しました。一般選者には、特選五句、並選四十五句の計五十句を選んいただきました。さらに、特別選者に特選三句、入選十句を選んいただきました。総合得点で賞を決定しました。

その際、選者、本部の協力を得て先行する類似句の確認を行い、作品そのものの削除、あるいは入賞外としたものがあります。

記念講演は平出隆先生にお願いしました。詩人が語る俳句の話を楽しみにしています。今大会については行き届かないことが多々あると承知しています。ご容赦の上、次回開催の糧としていただければ幸いです。

読売新聞社賞

手を置けば石語り出す広島忌

山口県周南市 伊藤恵美子

この石は慰霊碑の類ではなく、戦前から残る石造りの建造物の一部などではないかと想像する。それらは戦争を知る石であり、被爆した石である。普段は冷たく固い石にもきつと記憶があると感じた作者は、手を触れることによつて石の思いを聞きとつたのである。悲しみは人だけのものではないのかもしれない。石も長く辛い思いをしているのである。同時にそれは、作者の思いでもあるのだが、作者のような優しい手を持ちたいものだ。

西日本新聞社賞

下校児がもうとんぼうになっている

徳島県海部郡 中川 秀司

下校途中の小学生。低学年の子であろう。「もう」は、校門を出るとすぐに、のタイミングと思われる。家路には、興味をひかれるものがたくさんあるとみえる。草矢を射る、虫を捕まえる、川の中を覗く、など。どう考えても都会では難しい。農村の子か、あるいは作者の子供の時代の風景である。自由気ままに行ったり止まったりをくり返す蜻蛉と重なるのだが、今の子たちに、このような時間があったてほしいと切に思う。

時事通信社賞

ふらここの庭に戦車がやって来る

特別選者特選句

宇多喜代子選

麻酔中螢だつたか風だつたか

田中の小径

宮坂 静生選

死者たちが乗る朧夜の観覧車

大野ひろし

中村 和弘選

一頭も軍馬帰らず大夏野

相澤 礼子

寺井 谷子選

秋燈へむんずとつかみ牛産ます

増田 信雄

高野ムツオ選

天に天の川ヒロシマに太田川

松原 君代

秋尾 敏選

裸木や裏口がよく見えている

伊藤真知子

対馬 康子選

青時雨ことばは水でできている

尾内 以太

小林 貴子選

胡瓜に棘だれも守つてはくれない

鈴木 砂紅

永井江美子選

夏蝶に遅れて届く手紙かな

岩田 典子

久保 純夫選

蟬穴に火葉の匂い法学部

石口 榮

筑紫 磐井選

アリバイは紋白蝶に会いしのみ

関戸 信治

後藤 章選

窓の雪寝たきり妻の尿ぬくし

森 教安

安西 篤選

毛糸編む余生の色を足しながら

矢嶋 道子

奈良県奈良市 寺町 容子

庭のブランコを子供の大きな遊具と考えれば、戦車もおもちゃであって、子供が遊んでいるだけのことかもしれない。しかし、「ふらここの庭」と書かれると、平穏な家庭があり、円満な家族が暮らす家であるとも読める。そうであれば、そこに戦車がやって来れば、ふらここの家も壊滅状態になる。戦車の正体は何か。被害をもたらすような自然災害か、経済的破壊をきたす不測の事態か、あるいはウクライナの家庭に飛んでくる砲弾か。妄想は尽きない。

俳句のまちあらかわ賞

失言の多くは本音蟬しぐれ

北海道上川郡 中島 土方

政治家の失言の多いこと。本音であることは明らかである。批判を浴びて取り消してはいるが、本音が変わるわけではない。つまり、本音のほとんどは口に出せないものなのである。そして政治家に限らず、つい口から出てしまうものでもあるから、失言は繰り返し返される。思い切り本音をぶちまけることができれば気持ちいいだろうなあ。そう、蟬しぐれの蟬のように。中には、いつも本音を吐いている輩もいるが、これは失言とは言わないのだろうか。

北九州市長賞

蚯蚓鳴く骨無き兵の墓じまひ

兵庫県たつの市 杉原 青二

先の大戦で散った兵士の墓は、遺骨が無いまま八十年近くの歳月が過ぎた。

池田 澄子選
青信号炎天に人放たれる
金子美智恵

伊藤 政美選
逝く夏の廊下の奥をたしかめる
波多 洋子

柿本 多映選
戦争をしている国へ鳥帰る
小林万年青

桑原 三郎選
窓の雪寝たきり妻の尿ぬくし
森 教安

小菅 白藤選
戦争をしている国へ鳥帰る
小林万年青

鈴木 正治選
尻といふ平和が並ぶ汐干狩
衣川 次郎

鈴木八駄郎選
秋燈へむんずとつかみ牛産ます
増田 信雄

館岡 誠二選
蓮の実の飛び出し空家また増える
三浦 静佳

辻脇 系一選
引き裂かれコウゾ・ミツマタ・ウクライナ
川崎益太郎

前川 弘明選
折鶴に鋭角いつつ昭和の日
長友 巖

前田 弘選
春風をはさみ絵本を閉ちにけり
有松 洋子

山崎 聰選
にんげんの見える明るさ五月關
山本 敏倅

和田 浩一選
蟬穴に火葉の匂い法学部
石口 榮

親族も高齢化し、跡継ぎもいないとなると、墓の管理ができなくなる。墓じまいせざるを得ない。たとえ遺骨が無くても、後から子や孫が入ってくれば永続的に供養されるのであるが、それも無いとなると、申し訳なさも倍増する。改めて戦争の罪を思い、戦争の記憶が薄れてゆくことを憂慮するのである。地中の蚯蚓も寂しいと鳴いているではないか。

北九州市立文学館賞

逝く夏の廊下の奥をたしかめる

大阪府豊中市 波多 洋子

昭和十四年、渡辺白泉の「戦争が廊下の奥に立つてゐた」を意識して書いた作品である。白泉は、開戦前の廊下の奥に戦争の姿を確かなものとして見ていた訳だが、掲句の作者は確かなものとして見たのではない。あり得ないことだが、ひよっとしたら戦争が立っているのではないかと確かめたくなるような一抹の不安を抱いたのである。折しもロシアのウクライナ侵攻や中国の台湾政策、日本の軍備増強論など、材料はいくらでもある。



朝日新聞社賞 田村 葉さん



読売新聞社賞 伊藤恵美子さん



大会会場風景(中村会長挨拶)

「第三回センバツ」 全国高校生即吟俳句 「選手権」開催報告

黒岩 徳将

九月四日(日)に、現代俳句協会主催の「センバツ」全国高校生即吟俳句選手権(通称「セン俳!」)がオンラインにて開催された。試合方法・ルールは過去に準じた。

【結果】

- 優勝 洛南高等学校 伊藤 葉奈
 準優勝 甲府南高等学校 齊藤 健太
 三位 磐城高等学校 小野 心愛
 四位 名古屋高等学校 幸村 遥都
 五位 岡山朝日高等学校 辻 颯太郎
 入賞 大垣北高等学校 岸 快晴
 入賞 高崎高等学校 吉野 貴翔
 入賞 松山東高等学校 宇都宮駿介
 入賞 日本航空高等学校 日下部友奏
 入賞 立教池袋高等学校 辻村 幸多

特別賞

角川文化振興財団特別賞

岡崎東高等学校

河合 風芽

ポップコーンの行列避ける残暑かな

本阿弥書店特別賞

立教池袋高等学校

赤松 優

秋暑し蔵へ小径の長くあり

山路 花

東京四季出版特別賞

山路 花

岡山大安寺中等教育学校

山路 花

虫鳴くやけふのまぐらのやはらかさ

特別賞

豊田 伶和

高田高等学校

豊田 伶和

推しの生配信に虫の音かすか

谷口 春菜

松山東高等学校

谷口 春菜

明日から一人の部活虫の声

蔭 騰

海城高等学校

蔭 騰

投函ののちのひと押し秋暑し

堀内 晴斗

名古屋高等学校

堀内 晴斗

秋暑しマトリョーシカの親の親

セン俳! イベントレポート

網谷 菜桜

午前中の九十三名から十名にしぼられ、

準決勝が始まった。字題は「地」。

赤…誰よりも地を踏みしめて秋の象

(松山東高等学校・宇都宮駿介)

白…地を裂いて撫子ひとつ犬の傍

(甲府南高等学校・齊藤健太)

赤は具体性のある描写と主観的な把握の

二つの力で魅力を感じさせる。白は可憐な

撫子を「地を裂く」と表現したところに新

しさが見える。どちらも命の力を表現した

句だった。二・三で白。

赤…意地悪と言はれて秋の虹の赤

(高崎高等学校・吉野貴翔)

白…弟が被災地踏めば夏燕

(磐城高等学校・小野心愛)

前試合とは打って変わった、心情に目を

向けた句が並んだ。赤は色に焦点を絞るこ

とで言葉ににくい感情を仮託できていた。

白は家族の成長と新しい驚きをうまく言葉

に乗せていた。一・四で白。

赤…地図になき山道歩む帰燕かな

(名古屋高等学校・幸村遥都)

白…地域猫に懐かれてゐる案山子かな

(日本航空高等学校・日下部友奏)

赤は地図のないという把握が空を行く燕

にも通じる巧みな句。白は日常の中の意外

な一景を切り取った句。どちらも「かな」

という切字の力を正しく使えていた。三・

二で赤。

赤…新涼や町内地図を書き足して

(大垣北高等学校・岸快晴)

白…ほほづきが地獄に届くやうに根を

(洛南高等学校・伊藤葉奈)

赤が具象であるのに対して白はかなり抽象的な句であった。新涼の空気感を具体的な行動で描写している赤と、比喩表現と省略で読者を大きく揺さぶる力を持っていた白。正反対の対決は二―三で白が制した。

赤…ロケットの地を蹴るつよさ木蓮華

(岡山朝日高等学校・辻颯太郎)

白…地球儀の南極小さし鳥渡る

(立教池袋高等学校・辻村幸多)

赤白ともにダイナミックな景を詠み込んでいる。赤はロケットが「地を蹴る」という把握が新しい。白は発見をうまく季語と絡ませることができていた。三―二で赤。いよいよ勝ち抜き戦形式の決勝戦を迎えた。字題は「図」。

赤…蚊柱の意図なき高さ河は綺麗

(甲府南高等学校・齊藤健太)

白…図工室の林檎熟れるや絵を残させ

(岡山朝日高等学校・辻颯太郎)

どちらも中七で切って六音のフレーズを独立させている。赤の句は把握の面白さを詠んだのちに景の広がりを見せ、白の句は林檎を主体に持ってきて図工室の神秘的な生命感を描きあげた。三―二で赤。

赤…血を見せぬ恐竜図鑑秋出水

(名古屋高等学校・幸村遥都)

白…蚊柱の意図なき高さ河は綺麗

(甲府南高等学校・齊藤健太)

赤の句は、恐竜図鑑はやけにリアリティがあるのに、その描写の中には一滴の血も描かれていないという新鮮な気付きを詠んでいる。秋出水と取り合わせることでよって不安な様子も表現されているのだろう。一―四で白。

赤…白地図を辿る私は蛞蝓

(磐城高等学校・小野心愛)

白…蚊柱の意図なき高さ河は綺麗

(甲府南高等学校・齊藤健太)

赤は定まらない自分と蛞蝓を重ねて描いた一句。「私」をわたしと読むのか、わたくしと読むのかによってもそれぞれに想像が膨らむ。一―四で白。

赤…地図上のX地点に居る夜長

(洛南高等学校・伊藤葉奈)

白…蚊柱の意図なき高さ河は綺麗

(甲府南高等学校・齊藤健太)

どちらも人間について考えさせられる一句となった。赤のX地点は場所のみならず人生における今を表す意図もあるのだろうか。夜長という、どこか安心するような季語も自分の存在を確かに証明してくれている。四―一で赤が優勝となった。

昨年、一昨年とは違い俳句甲子園を行った後での開催となった。参加者の中には俳句甲子園常連校以外の学校名もあり、俳句

甲子園という大きな文化以外でも高校生の俳句文化が広まっていることにとても喜びを感じた。この大会が即吟に触れるきっかけとなった人も少なくはないだろう。即吟の時間は、短いように見えて今まで生きてきた時間すべてを凝縮したとても濃い時間なのだ。濃い時間の中で自分の内からあふれ出す言葉を拾い、顔も声も知らない全国各地の高校生と同じ土俵で勝負する、そんな貴重な機会を得られるこの大会がこれからも盛況であることを願うばかりだ。

リアルタイムの共有 田中亜美

「センバツ！ 全国高校生即吟俳句選手権」では充実した時間を過ごすことができました。高校生の皆さんの作品にエネルギーを頂戴した気がします。

準決勝は「地」、決勝は「図」でした。

誰よりも地を踏みしめて秋の象

(松山東) 宇都宮駿介

ロケットの地を蹴るつよさ木蓮華

(岡山朝日高等学校) 辻 颯太郎

血を見せぬ恐竜図鑑秋出水

(名古屋高等学校) 幸村遥都

白地図を辿る私は蛞蝓

(磐城高等学校) 小野心愛

蚊柱の意図なき高さ河は綺麗

(甲府南高等学校) 齊藤健太

地図上のX地点に居る夜長

(洛南高等学校)伊藤葉奈

第一句と第二句。地に足をつけた「秋の象」に対して、「ロケット」では大地からの解放が感じられます。重力を持つ生きものの哀しみが「秋」に象徴されるとしたら、「木蓮華」はロケットの形状を連想させて巧みです。第三句の「恐竜図鑑」はさりげない句ですが、生々しい現実が忌避されて抽象的な世界が広がる一方で、予想不可能な災害や災厄は暴力的に襲い掛かってくる、情報化社会のギャップを感じさせました。第四句の「白地図」も現代人のあてどなきを象徴するようです。進路や将来を指南する情報は溢れている。けれども「私」は未知の白地図を「蛭蝮」のように地を這って進むほかないのです。

第五句の「蚊柱」の清々しい美しさ。山梨県出身の飯田龍太の(一月の川一月の谷の中)のシンプルな前衛性を想起しました。第六句の「地図上」の句は優勝句。「X地点」という措辞に現代性と青春性を感じました。太宰治ではないですが、不安と恍惚の間を揺れ動く、そうした「夜長」のもの思いが世代を超えてリアルタイムで共有できるとは。どうか、これからも俳句を楽しんで下さい。

喜びと刺戟

堀田季何

多くの才能と出逢えることは、芸術人生における喜びの一つだ。第三回の「センバツ」！全国高校生即吟俳句選手権」にも審査員として関わっているのは、この喜びのためと言っても過言でない。

予選の席題「狗尾草」「残暑」「虫」は、難易度が高く、事前に席題を知った時は、大きな不安がよぎった。しかし、「猫じやらし垂れて下駄箱半開き 岸快晴」(虫鳴くやけふのまぐらのやはらかさ 山路花)《推しの生配信に虫の音かすか 豊田伶和》《猫じやらしめたゆたひ湯切りするをとこ 吉野貴翔》《秋暑しまとりヨシカの親の親 堀内晴斗》《夜の花は人を求めず虫時雨 辻村幸多》《虫集く何のためでもない隘路 日下部友奏》をはじめとする数多の秀句をリアルタイムで目にし、杞憂に過ぎなかつたことに安堵した。

準決勝の席題「地」「決勝の席題「図」は、それぞれ好勝負が繰り広げられた。準決勝は、全体的に勝敗が僅差だった印象である。審査員の顔ぶれが違ってれば、異なる結果になっていた可能性がある。(弟が被災地踏めば夏燕 小野心愛)《地図に無き山道歩む帰燕かな 幸村遥都》《ロケットの地を蹴るつよさ木蓮華 辻颯太郎》と

いった勝った側の句だけでなく、(誰よりも地を踏みしめて秋の象 宇都宮駿介)とあった、負けてしまった句も確かな収穫であった。決勝トーナメントは、第一試合から決勝戦まで勝ち上がった(蚊柱の意図なき高き河は綺麗 齊藤健太)と第一シードの(地図上のX地点に居る夜長 伊藤葉奈)が、審査員たちの心を鷲掴みにした感がある。文頭で述べた喜びに加え、毎回湧き上がる気持ちがある。それは、出場者たちと同じ俳人として受ける刺戟である。審査員である自分が同じ席題を同じ制限時間で与えられたら、果たして同レベルの句を作ることができるのかと。その晩、早速、俳筋力を鍛え直そうと思った。未来のライバルたちといつか句座を囲むために。

X地点からの眺め

堀切克洋

わたしが所属する結社の主宰は、「最後の一秒まで粘れ」と口にしています。「火事場の馬鹿力」が佳句を作るからと。実際に、席題が出てその場で即吟した句が、いくつも主宰の句集に収録されているのを目の当たりにし、即吟上手な師匠を敬愛しています。

即吟のむずかしさは、実は句を短い時間で詠むことではないんですよね。そこに「自分」をいかに滲ませることができるか。

少なくともわたしでの考えではそうで、「上手な句」や「面白い句」を作ろうとも、ここに〈私〉がなければ、きつと記憶に残らない句になってしまうと思っています。

地図上のX地点に居る夜長

伊藤葉奈

「地図上のX地点」からは、数学とか地理の問題を解いている場面を思い浮かべ、少し懐かしくもなりました。一方で、「X地点」はどこでもない場所も意味するわけで、自分がどこにいるかはわからない、しかし確実に自分はいる、そんな〈私〉を客観視する目線があるのは、「夜長」だからこそ。この句はわたしの記憶にも残りませんが、きつと作者本人が十年経っても、二十年経っても覚えていてのではないでしょう。ちょうど二十年前、高三だったころのわたしは、俳句とは無縁でしたし、のちに自分が俳句と出会うことなど想像していませんでした。でも、あのころに考えていたことや読んだ本は、いまでも覚えていますし、当時の「X地点」が現在という「Y地点」に間違いなくつながっているという確信があります。

台本の文字薄れゆく秋暑し

住祐吏奈

高校の演劇部でしょうか。台本はつねに持ち歩いているので、いざ立ち稽古をするころには、しわしわでポロポロ。これも芯のある〈私〉が一本通っている句ですね。

高三から二十年も経つと、立場や家族がルーティンを強力に形作ろうとしますから、X地点にいることの不安と喜びは、わたしとつての憧れでもあります。

セン俳！ 感想

阪西敦子

暑さの最中、そして、冷房の中で開催された「第三回センバツ！ 全国高校生即吟俳句選手権」、今年も審査に加えていた。

予選の句から触れたい。

猫じやらし抜いてどこから抜いたのか

学校法人上田煌桜学園さくら国際高等学校

岐阜キャンパス 河島勇人

チャージングな把握の猫じやらしの句。俳句では、ある現実に向したときの感興を伝えるために、感興自体ではなく感興の対象を描く。この句はもうひとつ反射して、その猫じやらしを見つめる人の疑問を描く。そのことよつて現れるのは一面の猫じやらしの原だ。

自販機の開かれてゐる残暑かな

岐阜県立大垣北高等学校 岸快晴

自動販売機はほとんどの時間閉じていて、その中に飲料を抱え、少しずつ吐き出している。それが開いているとき、とても目立つ。中は薄暗く部品が複雑に絡み合う。なんだか涼しい気がする内側へ、残暑の空気

が容赦なく入り込んでいく。屈強な機械の無防備なその姿。

天井の上には床がある残暑

洛南高等学校 伊藤葉奈

平屋でない限り天井の上には床があるが、部屋の中にある私たちには、床が下、天井が上。この倒錯と、私たちの上にさらに別の床があつて、その上に生活があつて：終りのない暑さである。

昼の虫紅白帽の紐は垂れ

名古屋高等学校 佐々木太亮

小学生が運動時にかぶる紅白帽。チームが目で分かるよう表と裏が紅白になっている。そのせいか、かぶり変えるときなどに首にかける紐(多くはゴムだ)を指にかけて振り回したりする。ゴムはすぐにのびて垂れる。すかさずかした昼の虫が絶妙。

勝ち負けではなく 瀬戸優理子

「コロナ禍における暫定的な大会」として始まった「セン俳！」も早三回目。学校単位のチームで参加の俳句甲子園とは異なり、個人で、自宅からオンラインで参加できる新しいスタイルの俳句イベントは、部活動だけにとらわれず俳句を愛好する全国各地の高校生に訴求。費用と時間をかけず気軽に表舞台に立てる貴重な機会にもなっているようだ。改めて、「セン俳」の可能性

性を感じた次第である。

私は今年も予選の投句作品を鑑賞する
トークコーナーを、曾根毅さん、野口る
さんと担当。「生まれたて」の投句一覽か
ら放たれる言葉の熱量と輝き。それらを大
切に受けとめながら、勝敗とはまた違う側
面から俳句の魅力を伝えられたらと、三人
で読み合った。参加した高校生にとっても、
同じ題で、同じ時間に、どのような句が詠
まれたかを見られるこのコーナーは貴重か
つ刺激的だと思う。今年も即吟とは思えな
い力作・秀作が数多く投句された。特に印
象的だった句を挙げる。

殺処分終えて狗尾草高し

日本航空高等学校 日下部友奏
「狗尾草」の兼題・即吟でこうした景が
詠まれた驚き。前半の緊迫感から後半の感
情の昇華まで、生死を見つめる視線が揺る
ぎない。

天上の上には床がある残暑

洛南高等学校 伊藤葉奈
認識のプロセスを言葉で丁寧でデッサン
して、世界を再構築、提示する技術。下五
の「残暑」に見慣れた景色を異界には変え
る効果も。

夜の花は人を求めず虫時雨

立教池袋高等学校 辻村幸多
詩情の豊かさに惹かれる。「夜の花」を

詠む「虫時雨」と配合する大胆さと新しさ。
ポップコーンの行列避ける残暑かな

岡崎東高等学校 河合風芽
等身大の言葉でシンプルに詠み上げてい
るが、読者参加の余白が広いところが魅力。
語感の明るさと裏腹な心理の屈折が透ける
青春性も良く、私の一押し句とした。

作らずに詠む

曾根 毅

即吟の良さは、一息のリズム。思いきり
や、大掴みの把握が端的に表れて勢いが出
る。この勢いが五七五のリズムに乗ると、
韻文の強みが発揮される。作るというよう
な作者の意図や計らいを超えたところにあ
る俳句そのものが、無意識に形成される。
以下、注目句。

第一ラウンド〈殺処分終えて狗尾草高し

日下部友奏〉〈玄関に置いたままでいる
猫じやらし 櫻田樹里〉〈猫じやらしちっ
ぼけな家族待ちわびて 山本琉碧〉〈猫じ
やらし垂れて下駄箱半開き 岸快晴〉〈雨
垂れの宿の匂ひや糸のこ草 入江真凜〉〈捨
てかねて鉢に挿したりねこじやらし 田村
謙悟〉〈糸のころや民宿の灯のやはらかく
宇都宮駿介〉〈ねこじやらし手にたい
ちよーは一步一步 関根杏華〉〈猫じやら
し触れてみづうみこそばゆさう 蔣騰〉〈猫

じやらし髭そる鏡の父親と 中村満里奈

第二ラウンド〈シーソーのタイヤ潰るる
残暑かな 服部亮汰〉〈残暑なり五分遅れ
のパスの来て 加納輝一〉〈今日で終わり
の線引けず秋暑し 中島彩音〉〈秋暑し卓
に突つ伏し子守唄 小野遙士〉〈メガホン
の声に残暑の重さあり 鈴木綾乃〉〈秋暑
し蔵へ小径の長くあり 赤松優〉〈節水の
貼り紙濡れてある残暑 富嶋大晃〉〈秋暑
し祖父の色褪せたルアー 宇都宮駿介〉〈残
暑かな兄に煙草の匂いして 関根杏華〉〈の
こぎりの刃の引つかかる残暑かな 谷口春
菜〉

第三ラウンド〈虫集く何のためでもない

隘路 日下部友奏〉〈虫の闇父の帰りのド
アの音 金澤英明〉〈開かずの戸開けるや
庭に虫集く 加納輝一〉〈ガードレールに
仏花のひとつ虫の闇 服部亮汰〉〈虫の音
仰臥の子規も聞きつるか 瀬野竜旺〉〈受
話器置き隔世覚ゆすがれ虫 山本琉碧〉・
〈虫鳴くや万年筆のインク果つ 田村謙悟〉
〈廃ビルの柱の傷や虫の鳴く 白石想一郎〉
〈虫鳴くやけふのまくららのやはらかさ 山
路花〉〈虫の音を聞いて龍馬を思い出す
鈴木哲平〉

第二回全国スポーツ俳句コンクール

事業部 大石雄鬼

日本スポーツ芸術協会(主催)と現代俳句協会(協賛)は、「国民体育大会」並びに「全国障がい者スポーツ大会」の文化プログラムの一つとして、「第二回「全国スポーツ俳句コンクール」を実施いたしました。国体を始めとした各種スポーツや日ごろ行っている運動をテーマとした俳句を広く募集した結果、東京オリンピック等のあった去年よりは減ったものの多くの応募がありました。

募集期間は二〇二二年七月一日(金)～八月十五日(月)。応募数は、一般の部で二〇〇〇作品(応募者数五四二名)、高校生以下の部で四八七作品(応募者数一五七名の応募がありました)。予選を現代俳句協会会員で行い、本選は現代俳句協会の会長及び幹事、国体開催県の栃木県の地区協から計七名、また日本スポーツ芸術協会の理事七名で行い、次の作品を入賞といたしました。

入賞作品は栃木県庁展望ギャラリーに十月一日(土)～七日(金)まで展示するとともに、入賞者には表彰状が授与されました。入賞作品は、次のとおりです。

(一般の部)

金賞

秋晴れや園児の数の金メダル

東京都 木目調

銀賞

春光を纏いし剣の小手決まる

千葉県 小田中準一

一頭の獣となりて漕ぐボート

福岡県 高永郁子

銅賞

車軸から汗も飛び散る車椅子

福島県 白瀬美智男

監督の指示はただ「あの虹へ打て」

岩手県 佐藤茂之

ピッチャーのポニーテールへ麦の風

東京都 中村たま実

優秀賞

激戦のプールに波の鎮まらず

東京都 破れ蓮

高跳びの少女ひそかに羽を持つ

大阪府 桃山過去

飛び込みの泡より人の生れけり

神奈川県 山田知明

サーフィンのひかりの筒を潜りけり

神奈川県 久保田聡

草萌えやポッチャポールの赤と青

神奈川県 猪狩鳳保

号砲を待つしげさや雲の峰

長野県 阿見幸恵

ボブスレー行け光速の繭となれ

埼玉県 深谷健

優勝のスパイクにキス青葉風

敗者にも同じ太陽雲の峰

東京都 露草うづら

バーベルの映る鏡やはたした神

山口県 横田敦子

広島県 福岡宏

(高校生以下の部)

金賞

ぼろぼろのボールの上に赤とんぼ

熊本県 摺木涼子(高一)

銀賞

槍投げや太古の空の輝いて

宮城県 横溝麻志穂(高三)

銅賞

ブランコをこいだらてつぼううまくなる

東京都 なかじまほ(小三)

優秀賞

背泳ぎの耳に歓声流れ込む

愛知県 渡邊美愛(高三)

くつきりと水着のかたち日焼け跡

岐阜県 塩野世知(高一)

ひた駆ける風死す今日は俺が風

群馬県 戦ノ白夜(高三)

およいだら空みずいろであたたかい

東京都 神野純(小一)

踏みきって記憶もとんだ新記録

千葉県 瑞(小五)

特集・永年会員記念作品

現代俳句協会永年在籍の皆さま、おめでとうございます。
六十年、四十年、三十年に到達なさった方々の記念の一句です。
詞芸益々のご健吟を祈念しております。

六十年永年会員作品
水清し花びら清し母の膝ひざ 藤井富美子

四十年永年会員作品

炎天のもう妻でなく草田男忌 赤澤 敬子
振り向かれざるもひた鳴く草雲雀 阿部 晶子
行方の見え隠れして白桔梗 安部ひさし
夕風や桜を見上げ合えば朋 池田 澄子
ウクライナの子らよとそよぐ猫じやらし 石川 貞夫
石白のはじめは少し霧を挽く 梅木 俊平
畦焼の母くろくろと踊りだす 河村 正浩
グラジオラスの白い群生学徒の忌 上月 大輔
片手には土筆握って杖の母 坂田 紀枝
川蟬の無言の行で杭がしら 佐々木いつき
雪虫や白い分だけ目が重い 佐々木 宏
核廃棄語る教皇冷雨なか 菅原せい二
麦埃あげて倒れし父の椅子 鈴木 紀子
ひたすらに夢のらくがきあめんぼう 関戸美智子
兵村の祭太鼓のお国振り 十河 宣洋

白粥のひかりを掬う良寛忌 高橋富久江
生きていることも贅沢梅薫る 土田 桂子
柿喰うや深き心を深きまま 西村 智治
雪降るやアイヌ悲劇の原生林 ばもととしお
日は水 前田 弘
存えて仰げるよろこび冬銀河 松下 けん
満月よ照らし続けよ握った手 森田 高司

三十年永年会員作品

どこへでも行けるつもり芋の露 麻生 明
獺の夢食べ散らかして春みぞれ 新出 朝子
手編み物ばかりの遺品昭和の日 有村 王志
荒縄に露のるい魄のことなぞ 飯土井志乃
羽衣伝説の村がざぶんと黄落す 池田 倫子
吾は木に木は冬天にもたれけり 石井 紅楓
筆立てにバラ火曜日チェ・ゲバラ 岩坪 英子
爽籟や仕切直して始めから 宇田 篤子
卒寿われ生死くみとるおのがじ 浦 廸子
喉奥に小骨の残る花の昼 上森 敦代
制服の肘光らせて卒業す 遠藤 寛子
ぼろぼろと耳垢のごと死ぬボクラ おおしる建
夏海へ松は肘張り鳩翔たす 岡野 順子
汗の身の冷たし吾は爬虫類 折井 眞琴
水呑んで透明人間十二月 加藤 浩子
芭蕉玉解く大黒さんは留守 加藤 征子
あめんぼう集まり童話始まりぬ 門屋 和子
何告げてゆく春風や髪乱し 上村 春子

杏ジャム煮つめて黄河澄みゆけり
 鞍摺れの黒き馬肌霜日和
 雪嶺のかくもしづかに師を憶ふ
 夜汽車にも濃淡のあり菊枕
 蔓ひくと動き出す村真葛原
 腰軽き水かげろふや天の縦
 越前の貌して並ぶ蟹解禁
 少年の水切りみごと楸邨忌
 天高し感謝状手に又生きん
 野良猫を好きな名で呼ぶ返り花
 一筋に生きし年月曼珠沙華
 夜の秋の砂を鳴かせて渚まで
 赤べこの首ふらふらと年詰まる
 ぬけて来た道えんえんと時雨るるか
 ガラス雛胸のあたりに泡ひとつ
 勿忘草忘れたことを忘れても
 蓮の骨不穏な音の不協和音
 片方は考える脚 青田の鷺
 三十而不立耳順わぬ秋の虹
 吾もまた枯野の景として歩く
 海底の裁判官はヒラメにて
 絵蠟燭点し久女の忌の孤独
 死ぬまでは人その後は草の絮
 接岸の流水なほも陸を押す
 異端もない破綻もない俳句じゃない
 望月の村に小さき舟溜り
 田植機に乗って明日が見えますか

神田恵美子
 草野眞理子
 櫛部 天思
 久野 康子
 後藤 岑生
 小橋 啓生
 小林 彌生
 齊藤 葉人
 坂井 法
 櫻井 了子
 島田 正子
 白澤 良子
 鈴木はつ子
 高田多加江
 高長 亜子
 武田香津子
 田中 賢治
 田中 哲夫
 田中 信克
 谷川 彰啓
 玉木 祐
 富田 花舟
 中岡 昌太
 中村 正幸
 並木 邑人
 成田 照子
 成田 友世

忘草忘らるるてふ別れあり
 秋刀魚焼く煙つかみに赤ん坊
 地謡やゆつくり曲がる冬の河
 冬銀河己がこころのみづみづし
 三番線に発車メロディー 鱗雲
 蟬穴を覗く地球の湿りかな
 かきこおりこれ氷山のひとかけら
 十二月八日外の見えない会議室
 初鏡かがみが齢をとりにつけり
 春の雪深山に鈴を振るように
 白山の尾となり撓ふ雪解川
 置いてきた俺が手を振る春の峠
 五月が笑うからもう少し生きるか
 紅葉して折々捨てしものはるか
 天の川 空席待ちの一枚で
 フランスの国のかたちの枯葉かな
 笑顔よき老でありたし木の实降る
 菖蒲湯に賞味期限の切れた顔
 くりかへし見る夢雪の降りつもり
 吾が死後は宇宙の深山に遊ぶべし
 山頭火青葉地獄でありぬべし
 夏めきて山が近づく騒がしさ
 翌檜を励ます蟬のひもすがら

成木 幸彦
 西村 弘子
 芳賀 陽子
 平田 蘭子
 布戸 道江
 星川 淳代
 細井 美人
 前田 秀子
 松居 一江
 松原 君代
 松本詩葉子
 松本 勇二
 三浦 澄子
 汀 圭子
 宮里 暁
 武藤 紀子
 茂木 房子
 山内 俳子洞
 山中多美子
 夜基津吐虫
 吉野 敏
 和田 幸司
 渡辺 真帆

投句のなかつた方々のお名前を以下に明記致します。
 藤沢無可有

現代俳句時評 (8)

赤野 四羽

ロード・オブ・ザ・写生論

この現代俳句時評も第八回を迎えるが、ここまで季語論や写生論といった、いわゆる「総合誌」の好むテーマに触れずに自由に書かせて頂いている。実に現代俳句協会からしくてありがたいことであるが、たまにはそういう話題も拾っておきたい。

角川「俳句」九月号では、浅川芳直が「悲観的写生説とリアリズム」という時評をものしている。冒頭、島田牙城の「写生の悲劇を考える」をあげ、写生という語になんでも背負わせる風潮への批判を紹介し、「デフレ主義的見解」と述べている。また、第二十三回山本健吉評論賞の柳元佑太「写生という奇怪なキメラ」、「楽園」の堀田季何「呵呵俳話」を元に、現代の写生論を整理する試みを意欲的に進めている。

ただ、やはり子規や虚子の俳論に突き当たってしまつたところは、俳句における二者の存在の大きさを痛感させる。もちろん、それぞれ現代俳句の源流に位置する俳人であり、その歴史的経緯を把握することには大いに意義がある。また、優れた作家としての考えを学ぶことも大事である。しかしながら、私たちは子規や虚子を、あるいは芭蕉ですら、「信仰」しているのではない。だから「学ぶ」のはよいが、

「従う」必要はない。よいと思ったことは学べばよいし、どうか、と思つたら別の道をとればよいのである。俳論、文学論、芸術論、手法、技術、思想、哲学…、現代に至るまでには多くの学ぶべき糧が積み上つている。

それを前提として、子規と虚子の写生論について少し考えてみよう。時評において浅川は「写生の価値づけにおいて、子規、虚子の説は軌を一にする」と述べているが、私見としてはそもそも「位置づけ」が異なるのではないかと考えている。たとえば『俳諧大要』に、

〈空想と写実と合同して一種非空非実の大文学を製出せざるべからず。空想に偏僻し写実に拘泥する者は固よりその至る者に非るなり。〉

とあるように、子規にとつて目的は俳句という「文学」であり、写生(写実)は方法論のひとつである。方法論であるから、いたずらに拘泥することにも問題がある、としつかり述べている。

一方、虚子の「客観写生」はスローガンであり、『俳句への道』において「俳句はどこまでも客観写生の技倆を磨く必要がある」と述べるように、方法論というよりは目的論に近い。

これは大きな違いだ。「方法論」としての写生は、one of themであり、代替が可能であり、広い外部がある。しかし、「目的論」/スローガンとしての写生は、引つ込めることができず、外部がない。子規が書いているように、歴史的にも題詠という軸をもつ俳句は元來、写生(写実)のみから構成されるものではない。だからスローガン化してしまうと、「写生」という語のなかにあれやこれや、と無理やり詰め込んでいくしかないわけである。これが島田のいう「写生の悲劇」であり、柳元のいう「奇怪なキメラ」が生じる要因ではないだろうか。

虚子は『俳句への道』において、こんなことも書いている。

〈人々によつて違ふ客観の天地がある、作者はその作者が見た客観の天地を描く。これが即ち客観写生である。〉
これを「客観写生」というのは、通常の語の意味からは難しい。客観とは通常、誰が見ても同様にみえるような「主観から独立して存在するもの」を指す。作者それぞれに見えるものを書くのは「主観写生」というべきものであろう。「客観写生」に加えて「花鳥諷詠」を掲げているところからも、虚子はこの韜晦を意識的にやっている節がある。通常の語としては、客観とは感情を排することであり、諷詠とは感情を込めることであるから、これらのスローガンは矛盾であり、「ダブルバインド」である。しかしその韜晦によつて、限定的なスローガンのなかに何でも詰め込むことができることに気づいたのではないだろうか。

というわけで私としては、写生という語の取り扱ひについては島田の立場に近い。これらの韜晦に振り回されるこ

とによる益は少なく、ひとつひとつの方法論や考え方をきちんと腑分けして吟味した方が勉強になると考える。

しかし、なぜ虚子は写生を方法論にとどめず、スローガン化したのだろうか。先ほど「信仰しているのではない」と書いたが、虚子はむしろ「信仰にしたかった」のではないだろうか。具体的にいえば、浄土真宗をモデルにしているのではないか。

先日、俳句アトラス代表の林誠司が、ホトトギスの重鎮、深見けん二の興味深い証言を紹介していた。

〈その時、虚子は、
明易や花鳥諷詠南無阿弥陀

という句を出した。

「明易」は「短夜」とほぼ同義で、夏の季語。

深見先生は、虚子に向かつて、

この「花鳥諷詠」と「南無阿弥陀」は並列と考えてよろしいですか。

と質問した。

つまり、虚子先生は「南無阿弥陀仏」(念仏)を信仰するように、「花鳥諷詠」を信仰する…、そういう解釈でいいか、と尋ねたのである。

虚子は、

そのように考えていただけで結構です。

と答えた。〉

(<https://ameblo.jp/seijihyys/entry-12755274651.html>)

この証言が正しければ、虚子は明らかに「花鳥諷詠」を念仏のように考えていたことになる。これを唱えていれば、極楽浄土へいけるといわけだ。「俳句は極楽の文学である」

との言もこれと合致する。

さらに『俳句への道』で虚子は、

「偉い人が出て来れば主観客観自由自在の境地に達することができ。しかし平凡な人はどこまでも客観描写に終始してそれで終るがよろしい。」

と書くが、これも浄土真宗の祖、親鸞の「凡夫は自力では往生を遂げることはできず、念仏によって他力に頼るしかない(他力本願)」との思想の流用に見える。虚子は東本願寺の門徒であり、また東本願寺第二十三代法主、大谷光演との交流もあった。これだけ揃うと、「虚子真宗モデル説」を無下にはできないのではないか。

ただ、肝心の仏教観については疑問がある。たとえば虚子は『月並研究』にて、芭蕉の、

道のべの木槿は馬にくはれけり

芭蕉

物いへば唇寒し秋の風

を月並みとし、理由として

「二方に大活眼を開きながら尚一方に文学と道徳とを混在している」

と述べているが、ここには典型的な勘違いがみてとれる。仏教的な悟りというものは、きちんと世俗の倫理に戻ってこなければ完成しない。悟りの過程を描いたとされる十牛図でも、最後は世俗に帰ってゆく。安易な相対化やニヒリズムに陥ったままでは動物化してしまい、「生悟り」「野狐禪」に終わるのである。つまり、道徳や慈悲の心の混在している芭蕉の在り方こそが必要なのだ。

また親鸞の思想を伝えたとされる『歎異抄』(岩波文庫)の現代語訳にはこうある。

「念仏はわれらを恍惚の境に導くものではない。現実の自身に眼覚めしめるものである。信心は浄土のあこがれにあるのではない。人間生活の上で大悲の願心を感じせしめるにあるのである。」

一方、虚子は『俳句への道』でこう述べる。

「如何に窮乏の生活に居ても、如何に病苦に悩んでいても、一たび心を花鳥風月に寄することによってその生活苦を忘れ病苦を忘れ、たとい一瞬時といえども極楽の境に心を置くことが出来る。」

見事に正反対である。

酌婦来る灯取虫より汚きが

虚子

大寒の埃の如く人死ぬる

にみられるように、虚子は弱い立場の人々には冷酷であったが、親鸞は「悪人正機」を唱え、そういった末世の底辺に苦しむ衆生をこそ救うために力を尽くした人物である。「悪人正機」とは、「末世の悪人は生きるために悪事を離れられない悲しみを持つことにより、むしろ往生に近い存在である」という考え方だ。

これを踏まえると、

初空や大悪人虚子の頭上に

の句も自己卑下というよりはむしろ、「自分こそ極楽に近い存在である」との強烈な自我の発露とみえてくる。考えてみれば、深い信仰があれば「花鳥諷詠」を念仏と並列に置くわけではない。それは親鸞と自分を並列に置くに等しいのだから、一流のふてぶてしさというべきか。

このように虚子は俳句結社蓮宮の形態として浄土真宗を模した可能性が高く、そのために「客観写生」「花鳥諷詠」

を念仏のごとくスローガン化したのが、残念ながら思想の内実としては親鸞とかけ離れていたようである。もちろん外形が浄土真宗モデルであったとしても、中身が一致する必要まではない。ただ、虚子と仏教思想との関連を論じる際には、その内実についてきちんと検討する必要があるだろう。

少し話は変わるが、柳元の論をはじめ、俳論の多くは絵画を比較対象とする。しかし、こと写生(写真)についていうなら、参照すべきジャンルはもう一つあるのではないだろうか。

そう、「写真」である。

ありのままを写すということについては、最強のジャンルといってもよい。写真は媒体それ自身が写実性と結びついているため、よほど変則的なことをしない限りは写実性から逃れられない。すなわち、写真論は写実性に向き合う思考の宝庫というわけだ。

ここでは俳論ではしばしば登場するロラン・バルトの写真論を取り上げてみよう。バルトは俳句論においては十分な数の作品に触れているとはいえず、正直偏っているとは思いますが、それでも思索は鋭い。写真論も然りである。

バルトの独特な写真論として知られる「明るい部屋」では、写真の表現は「ストウデイウム／プンクトウム」という二者から構成されると述べる。ストウデイウムは知識や教養、一般的関心に依拠するような文化的コードに基づくものであり、プンクトウムとはストウデイウムを破壊するものであり、記号化できないが、観る者を突き刺すなにかのことである。「呵呵俳話」で堀田季何がいうところの「リ

アリテイ」はおそらく、このプンクトウムに近いものである。また、通俗的イメージの貼りついたイメージ群を衝突させることで破壊し、詩的直観に到達しようとする赤尾兜子の「第三イメージ論」もこの考え方に近いように思われる。

賢明な読者諸氏はお気づきのように、バルトのこの概念は必ずしも写真に限定されるものではない。そこでバルトは、写真のプンクトウムとして「かつてあった」という本質を指摘する。それは「時間」であり、「死」でもある。これはどちらかといえば短歌の私性に接近するものである。ただ残念ながら、現代においては写真や画像の加工や合成は容易であり、短歌の私性と同様、「かつてあった」という真実性はほぼ失われつつある。

さて、「悲観的写生説とリアリズム」の結びで浅川は、「もう少しおらかな写生観へ」と書く。これには私も同意するのだが、少しロジックは異なる。浅川は技術的写生観から脱却することで、おらかな写生へ到達する道を示している。しかし私はむしろ逆であり、子規の一技術、方法論としての写生に戻ることで、おらかなさへ到達できると考える。というのも、「写生」が虚子的なスローガンであり念仏である限り、それは「大きく」「尊く」ある必要に囚われる。One of themの方法論に戻して初めて、写生はおおらかに自由に扱えるものとなる。「どこまでも客観描写に終始してそれで終るがよろしい」の事大主義から脱却しなければ、写生の重荷を降ろすことは難しいだろう。

百年の旅を帰りにて枯野に立つ

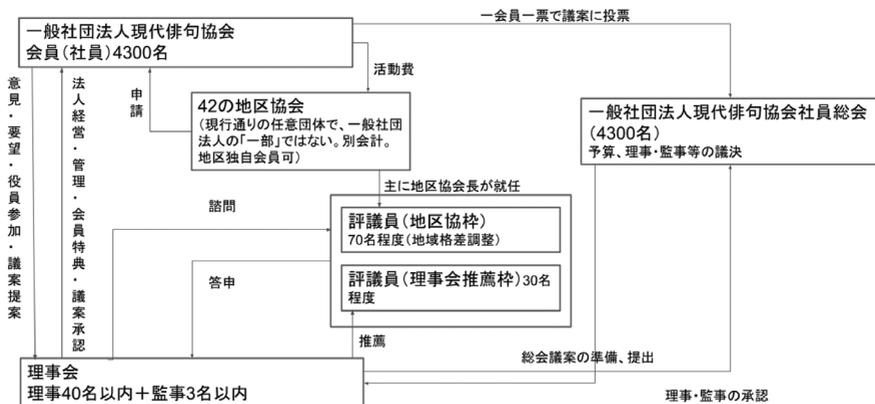
赤野四羽

現代俳句協会の法人化について(2)

幹事長 後藤 章



一般社団法人現代俳句協会 組織図
(非営利型)



一般社団法人の組織と定款(案)が2022年9月及び10月の業務運営委員会、幹事会において了承されましたので、ご報告いたします。

今回決定の大事な点は、法人化は本部組織のみであることです。地区協会は従来通り任意団体のままです。この形態を取りました理由は、主に銀行口座開設に関して地区協会と一体の法人化は実質的に不可能であることが判明したためです。

先に6月号にてお示ししました法人化の行程表でいけば、第二段階が終了したところです。本来は9月中に終了の予定でしたが二か月遅れています。現在、定款について法務局等と協議しております。順調にいけば来年1月に法人登記となります。当初10月の段階で全国に赴き説明会を開く予定でしたが、説明会はZoomによる説明会を4回から5回開くことに変更いたします。現代俳句全国大会が終了次第順次開催してゆく予定です。

地区協会と本部との関係については、定款が定まり次第、法人と任意団体という関係に則り覚書や契約の形態において様々な取り決めをしてゆくこととなります。現在規約の改定にも着手しており、順次具体的な案が定まり次第、42地区協会と協議してゆくこととなります。

今後は従来以上に、地区協会の自主的活動範囲が広がり活性化が図れることと思います。それを基盤として社団法人現代俳句協会への入会者の増加を期待するものです。

2023

現代俳句

カレンダー

揮		毫	
宮坂静生	寺井谷子	对馬康子	
宇多喜代子	松田ひろむ	小林貴子	
福本弘明	久行保徳	久保純夫	
後藤 章	花房八重子	佐怒賀正美	
米田規子	衣川次郎	石 寒太	
山本敏倅	高野ムツオ	花谷 清	
中村和弘	神野紗希	鈴鹿呂仁	
山崎十生	松澤雅世	筑紫磐井	
山本鬼之介	安西 篤	永井江美子	(掲載順)
佐藤文子	池田澄子		
野木桃花	秋尾 敏		

- ◎体裁 四色刷・月別壁掛・壁掛時サイズ 36×51.5センチ
- ◎定価 一部 一、五〇〇円(税込) 五〇部以上 二割引
- ◎送料 実費

お申込みは東京四季出版まで

東京四季出版 〒189-0013 東京都東村山市栄町2-22-28 電話(042)399-2180 FAX(042)399-2181

会員の皆様へ

令和4年度の自然災害被災会員に対する来年度(令和5年度)年会費の免除について

台風や豪雨災害など本年度も各地に自然災害が発生しました。被災された会員の皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。本年、被災された会員の方々につきましては、過去の震災や風水害などの例に倣い、次のとおり、自己申告を以て、来たる令和5年度の年会費(40歳以上の方は1万円、30歳以上40歳未満の方は3千円)につきまして、免除措置の申請を受付けます。

- (1) 別途定める所定様式(本部又は各地区事務局に備置)により被災した会員からの申請に基づき審査、決定します。

- (2) 本年12月末現在におきまして既往年度年会費の未納がある場合は、本免除額を当該未納年会費に充当し
ます。

(お問合せ先) 現代俳句協会 事務局

電話 03(38339)8190

FAX 03(38339)8191

メール gendaihaiku@bc.wakwak.com

「翌檜篇」

(44)

関西青年部 編

関西青年部の作家

日向美菜

自薦5句

裸木の虚に葉音のあふれけり

チエンバロに薄き白布や降誕祭

着膨れし旅の終はりも始まりも

北風や銀の混じりし白馬の尾

輪となれる白鳥風を生み出せり

略歴

二〇〇二年生まれ。「蒼海」所属、関西俳句会「ふらこ」

共同代表

最近のおすすめ

最近、パフェをよく食す。パフェは苺や桃などの果物で季節を表現する。また、アイス、クリーム、ジュレなど飽きさせないための工夫がなされた層は連作の展開を思わせる。俳人にぴったりのスイーツだと思う。

浜脇不如帰句集『ぷらずま・はいきつく』

—— 真剣勝負のハイキック

岡村知昭

脳内に詰め込まれたあらゆる情報と知識を、独自の回路を通じて五七五へ落とし込んでいくのが、浜脇不如帰氏の俳句である。そして一冊の句集に、作品を自選でまとめるのではなく、とにかくありったけ詰め込んでいくのが浜脇氏の句集である。この第二句集で、その姿勢はさらに徹底されて展開しているのだが、それでも作者としてはまだ足りない、もっと作品を収めたい、と思っていそうである。一句に、一冊に込められた焦燥含みの切実さは、ときに空回りしたり、意図や意味が混乱したりもする（作者も読者も）。しかし、その一部始終を晒してしまつてこそその浜脇氏の俳句であり、句集であるのだから、読み手の側としても、懸命に己が身の内の回路を駆使して、浜脇氏と向き合おうしかない。一撃必殺の「ぷらずま・はいきつく」、もろに食らつてしまつては昏倒必至。読み手と浜脇氏の真剣勝負

負に、終わりは無い。

じゅうじかは7兆わりびき初がつを

低炭素社会激奨勇魚鍋

羽子板やはれてまつぎきしげるいろ

山眠るやがて暖簾にハイキック

おんらいんしょつぶのシラタキのカラミ

(セイエイ印刷出版)

大島雄作句集『明日』

姫子松一樹

『明日』は『俳壇』の三月月に一回の連載「四季巡詠」三十三句連作をベースに結社誌で発表したものを加えて再編成した大島雄作第六句集だ。前述の締め切りがあったことから前作『一滴』と比べて少し挑戦的な句集となっている。

散る桜一キロ飛んで鳥になる

いきなり帯にメタモルフォーゼ俳句がくる。散る桜は正直一キロも飛ばずに木の根元あたりにひらひら落ちるのが精一杯だと思うが、確かにそれだけ飛ぶことができたなら変身しそうではあると妙に納得ができる。

仔猫覚む^{オム}のやうな伸びをして

Ωにびっくりするが、青垣のモットーである平明な句。ちなみに雄作は、見た目は怖い猫を多頭飼っている愛猫家の可愛いおじさんだ。

ソーダ水紙ナプキンの詩は忘る

俳人あるあるかもしれない。常日頃からふつと句が生まれる時がある。そんなときに限ってメモ帳や句帳が無く、仕方なく紙ナプキンに書く。ソーダ水の泡がふつふつと消えていくのは記憶のメタファー。

形代に息かけ吾はだれだらう

形代に魂が持っていかれてしまったようだ。まさか酸欠で記憶喪失になったわけではあるまい。ユーモアのある句は関西俳人ならではのかもしれない。

竹皮を脱ぐスタートは横一線

竹の成長の話なのになぜか人間もそうであるかのように思ってしまうのは読み込みすぎか。同世代俳人の活躍を見るたびにぐぬぬとなるが、精進が足りないだけだと戒められたような気になる。スタートは横一線、今日も精進あるのみ。

(本阿弥書店)

近藤栄治著

『昭和俳句の挑戦者たち』

—そして草田男— 石井清吾

近藤栄治氏は俳誌「青垣」（大島雄作代表）に創刊直後より俳論を連載中で、高柳重信論で第三十回現代俳句評論賞を受け、近著に「俳句のトポス—光と影」がある。本著では昭和初期から戦争を挟んで戦後に至る激動の時代に活躍した五人の俳人について、時代背景、生い立ちと共に、各句集に沿って作品を論じている。

第一部 草城と誓子

近代的な素材とエロティシズムを詠った草城と、即物的な文体で都市や職場の素材を詠んだ誓子は、「ホトトギス」で囑望されたが虚子との確執があり、それぞれ「旗艦」「馬酔木」に拠った。しかし二人は無季俳句を容認する可否かで道を違えた。のちに戦争と長い療養生活の

後、共に内面化傾向を強め、草城は「青玄」で内省的な病床詠を残し、誓子は「天狼」を創刊し根源俳句を唱えた。

新興俳句において草城と誓子の掲げた人間主義と詩性の追求は、人間探求派の作品や主張と共に、社会性俳句を含めた戦後の現代俳句に大きな影響を与えたと近藤氏は総括している。

第二部 窓秋と白泉

窓秋は独特の感性と平明な言語表現で幻想的世界を創出する抒情詩人として新興俳句に登場し強烈な印象を残した。

頭の中で白い夏野となつてゐる
ちるさくら海あをければ海へちる

季感より詩感を重視し無季俳句へと進んだ。満州移住、戦後を通じ長い空白期間と短い活動期間を繰り返したが、その抒情詩には根強い支持者があつた。

白泉は散文調の斬新な俳句表現で社会や庶民の生活を題材に、ペーソス(哀感・哀愁)ある句、また戦争を感じさせるイロニーある無季の句を発表した。

街燈は夜霧にぬれるためにある
戦争が廊下の奥に立つてゐた

京大事件による検挙と応召による長い空白期間があり、戦後、俳壇で殆ど活動できないまま病没。彼を師と仰ぐ三橋敏雄らの尽力により自筆の遺稿が発見され句集が世に出た。近藤氏はその句集に図書館で出会った感動を記している。

第三部 中村草田男

草田男は青年期に身近な人の死から精神を病み「ラザロ体験」をしたが、斎藤茂吉の短歌の写生に感動したのをきっかけに句作に励んで克服した。体調が戻り復学、就職、結婚を経て詩人としての青年期を迎え「ホトトギス」にあつて有季定型を守りながら斬新な句を詠み続けた。戦後は「萬緑」を創刊し、俳句は詠む対象の生命と作者の内部生命が一体となる作品を目指すべきとして、新興俳句・社会性俳句の文学性を批判し、多くの論争を行った。

草田男作品は観念的で難解との評もあるが、近藤氏は各句集の跋と抄出した代表句について客観的かつ率直に論評し、草田男の実像に迫っている。

(創風社出版)

◎北海道

中北海道・東北海道・南北海道・北北海道

オリオンにふれて風響樹がはぜる 青山 醉鳴
 キルケゴール忌視野いつばいの綿虫来 有田 裕子
 落葉松黄葉笑い出したら止まらない 石川 青狼
 冬帽子月にかぶせてみたくなり 今堀 冷子
 運慶の施す地肌冬の月 F よしと
 文鎮に静かな重さ雪の夜 大河原倫子
 ダンプカー連ね幹線除雪中 梶 鴻風
 チャップリンの手足饒舌春よ来い 亀松 澄江
 湯船から鼻歌流る冬至の夜 源 二男
 サガレンへ海峡渡る冬鷗 小林 克史
 神様の涎ともなう霏かな 金野 克典
 凍のほり易きは杉の秀が揃ひ 齊藤ふじお
 ジュエリーアイス輝く浜の雪はらし 佐藤 和則
 一月一日午前も午後もゆうぐれも 信藤 詔子
 黙るたび恋に近づく冬渚 瀬戸優理子
 怒濤はるか闇を哭かせてゐる鯨 田口くらら
 腹見せぬ不手腐れたる海鼠買ふ 角田 桑里
 六十年妻は親友冬薔薇 中島 土方
 王子様なんていないわ白鳥湖 中村きみどり
 マントからやおら取り出す一升瓶 西村 奈津
 はららごの正装海苔の帯しめて 林 冬美
 AIのつむぎし百句冬ざるる 久居 智子
 七種や背の子が聞きし母の歌 船矢 深雪

第14回 現代俳句の風

◎東北

青森・岩手・秋田・宮城・山形・福島

おくれ毛にあつ風花の音がする 松原 静子
 面取りて大根を煮る夕べかな 宮坪 勝美
 息白く人間生きている印 山内俳子洞
 顎細き若者連れて葉喰 横山いさを
 初雪に拘りひとひ喪失す 米山 幸喜
 抽斗の恋文いつか狐火に 渡辺のり子
 神棚にオモチャの包み聖夜待つ 青田 士郎
 地吹雪に韋駄天目鼻欠きしまま 阿部 貴美
 白鳥の放ちし声の生乾き 五日市明子
 人居ぬ村闇のあはひに残る虫 植木 國夫
 廃校を二つも抱き山眠る 大石 文雄
 オゾン層に穴地球にすぎま風 大瀬 響史
 火事とほく絵空事よりこぼれをり 小田桐妙女
 こだはりをもちたる暮し枯蠟螂 片倉 弓
 山峡は甕の底なり寒の月 鎌倉 道彦
 冬の星ひとりになれば語り出す 日下 節子
 しばるるや宵の明星ひかり増す 後藤 冴子
 音階はブラームスです冬銀河 小松 雅朗
 飴色の木札初湯の鶴亀錠 坂本 幽弦
 冬晴れや一步伸ばして試歩の径 佐々木徳子
 きよらかな野心もありて白鳥来 佐藤 詠子
 多喜二忌やキリキリと螺子を捲く 清水 茉紀
 黎明の真白き月にある淑気 菅原ミヤ子

裸木の終か始めか天を向く 鈴木 純子
 冬薔薇の蕾つつみし夢ひとつ 高橋きみゑ
 冬將軍コロナに負けたという噂 武田 稲子
 雪霏々と人口ゼロの村の音 唯木イツ子
 芯かへるシャーペンやはし雪兆し 種村聖巴子
 初雪や地肌を曝す 検温器 土谷 敏雄
 北風に攫われそうな影となる 永野 シン
 しばるるや歪みし顔が鏡中に 新山のぼる
 日溜りは彼女らのため花八手 丹羽 裕子
 熱爛やこの世に長居してをりぬ 服部きみ子
 小六月白き寝釈迦の鼓動聴く 星 節子
 鯽大根昭和の声の大家族 丸山千代子
 難民の国境の壁冬どざるる 宮崎 哲
 山眠るごみ箱に入る蛇の目傘 八島 敏
 闇汁のブラックホールへ箸を入れ 渡部 陽子

◎東京 都区・多摩
 青木 栄子
 飛鳥 遊子
 荒井 類
 飯田春紅庵
 猪越 玲
 石口りんご
 石綿 久子
 市原 正直

第14回 現代俳句の風

身を証すものを問はるる枯野かな 稲吉 豊
 その顔はやはり悪役寒鳥 今村たかし
 缶コーヒーごとん温めたや掌 榎並 恵那
 「九軍神」他未帰還機開戦日 岡崎たかね
 下仁田の葱を背負うて帰京かな 加那屋こあ
 横文字の氾濫原に去年今年 亀津ひのとり
 隙間風とぼけたスキマ今どこへ 川名つぎお
 天よりの片道切符落ち葉掃く 北村眞貴子
 孤高なり寒月光の大樗 栗原 節子
 笑いながら老いていくなり寒北斗 小高 沙羅
 空白は介護のしるし古日記 小林 和子
 冬田より平城京を掘り出しぬ 斉田 仁
 木を見せて森を隠して雪女郎 坂本 空
 ふれたきは冬の星座と亡夫の掌 佐々木克子
 見得、睨み、羽子板市の雨あがる 白石 正人
 初冬の押ししてだめなら卵焼 杉浦 一枝
 大戦を生きて卒寿の年の花 鈴木 邦女
 良い読み手になってひらひら小春日の 芹沢 愛子
 行く年を黄の点滅の中にいる 高野 公一
 国境の閉ざされたまま年迎う 高橋三津子
 冬帽子持主もまた色褪せて 伊達 公子
 善悪のすきまを埋めている落葉 対馬 康子
 白息を使徒と思えば海荒れて 遠山 郁好
 冬ぬくし賞味期限の卵茹で 富田 花舟
 風紋てふ風の轍や磯時雨 中田とも子

毛糸編む答えはいつもはぐらかす
 水鳥のおのが影ひく青い空
 棺窓開き広ごる冬銀河
 インバネス祖父と観にきしシネマかな
 怒ること忘れたるかに枯蓮
 ふくろうの翼の波動言う聾児
 漱石忌暈に拾ふ猫の髭
 ラグビーボール四十五度の初御空
 儉約は武芸の一つ隙間張
 望郷の寒最中なる心地とぞ
 ボクサーは野生の眼木の実降る
 参道に挽げたヒールや神の留守
 歓喜もて氷柱とけゆく日の光
 寒梅やどの音符から上を向く
 秩父の大人東北の大人寒波来
 死に支度のもりがそのうち冬支度
 為政者の驕り戒む除夜の鐘
 その元氣吾にもくれよ寒雀
 なぐり書きの寅一字のみ年賀状
 絵双六向田邦子のゐた昭和
 沢庵の石の重たき考の声
 火のごとし兄の柩の冬薔薇
 今日も又歩きたくなる冬帽子
 夏目るんり
 西前千恵
 西本明未
 根岸操
 林暁兵
 平田恒子
 藤色葉菜
 本城清
 圓山二幸子
 水野星閣
 宮川夏
 武藤幹
 山崎百花
 山本敏倅
 吉澤利枝
 相澤礼子
 青島哲夫
 秋元幸治
 秋山貞彦
 浅野とし子
 網代奈津江
 安藤玲子
 飯塚芙紅

◎ 関 東

茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川

第14回 現代俳句の風

縄跳びの止みていつしか寂光土
 寒夕焼どこかにきつとある出口
 人という命に乗ってこける冬
 若水を掬へば光る生命線
 初夢は月の砂漠を駆けており
 降り積む雪禅に始まり禅に終ふ
 荒野には冬の足跡樹に微熱
 雨音の朝まで続く開戦日
 寒鯉の纏える泥の息づける
 冬北斗なべて言ふなと師の言葉
 マスクして言葉の洩れを塞ぎけり
 凍星のしづく水琴窟謳ふ
 稜線はあかねに暮るる雪淺間
 手漉和紙積み上げ共に年を越す
 鮫鱈を食うて経年劣化かな
 怒号飛び津波の寄せる冬の闇
 寒鯉の思念か水も動かざる
 冬銀河タイムマシンの乗り心地
 草光る畑も光る霜の朝
 ポケットに昭和があったナフタリン
 小六月凶のみくじのそれもよし
 晩年も闘志まんまん冬紅葉
 寝返りをきらふ毛布を畳む朝
 余生とはアドリブ時に冬の雷
 弁当を待つ母子の列クリスマス
 池田博臣
 石井紀美子
 石川夏山
 石原玲子
 犬山京子
 今井千穂子
 岩田信
 植田いく子
 牛丸幸彦
 内田ゆり子
 江田尚可子
 大垣鹿乃子
 大沢友江
 大竹照子
 大測久幸
 岡田宣子
 尾形ゆきお
 小川紫翠
 奥村純子
 小沢一郎
 小田島洋子
 小野功
 片桐基城
 加藤かほる
 金子泉美

英靈に二礼二拍の初詣
 筑波嶺や初日の昇る音ひびく
 天氣図の裏で身支度冬將軍
 指先の小さな刺や年の暮
 風花や小さき祈りの粒舞いて
 ゼブラポールペン転がっている冬座敷
 葉をおとしのちのあかし桜の芽
 声だけが凍蝶を追ひ越してゆく
 星生まる柚子湯に膝を抱きおれば
 井の中の平和を灯す聖夜かな
 飲めず喰へず胃カメラ呑みて寒に入る
 兜太かの狼といま生きをらむ
 舟が出るぞ三途の川の初時雨
 伊達眼鏡かけ梟の息づかひ
 冬天の透きゆく穢土の透きゆけよ
 大寒や乾いてゐたる犬の鼻
 異体字のボトル打ち寄せ冬の海
 朝刊と冬満月を抱きしめる
 着ぶくれて風の声聞く山家かな
 畑打つや嘘一ツなき寒の晴
 独り居の不要不急や虎落笛
 太陽のこぼれ膨らむ冬の海
 千両や青天の日に退院す
 三寒のかくれどころのなき大樹
 十二月八日丹田深呼吸
 鹿又 英一
 軽部 榮子
 川島記依子
 河野 正子
 木佐貫雅美
 北島 洋子
 北原 恵子
 木下 周子
 久野 康子
 黒川由紀子
 劔物 劔二
 小泉 信
 國分 三徳
 小島ノブヨシ
 後藤よしみ
 小松崎黎子
 近藤 徹平
 齋藤 溥子
 佐久間眞城
 佐々木重満
 佐藤紀生子
 佐藤 廣枝
 佐野つる女
 塩野谷 仁
 重田 忠雄

第14回 現代俳句の風

寒鯉の浮きも沈みもせぬ力
 葱汁は 体あたたため 今日も無事
 一片の雲も許さず寒の空
 ひとり逝きふたり逝きして雪残る
 久方の雨はおろしたての毛布
 白障子開けてやんごとなき自由
 冬夕 焼へ鴉 一団の 唸うなり喊こゑ
 削ぐたびに昨日が今日になる海鼠
 落ち葉して存在感の終りかな
 冬の翡翠隠れ水脈あり不戦なり
 軒先に何んでも吊し冬に入る
 2メートル空ける足形初景色
 眞綿引く姑と二人の冬座敷
 コロナまだ居坐るつもりか里は雪
 神苑の何れも巨木にて冬木
 9歳の孫を相手の詰将棋
 手袋の握手あなたの手でしようか
 初しぐれ大軽率鳥のひよこひよこ
 十二月忘れたきもの忘れ去る
 一番若い今日済せよう煤払
 アマビエの絵も吊る聖樹幼稚園
 俳人に洗脳されている海鼠
 ムンク展風邪の男が紛れ込む
 鳥の来る枯木が老の理想なり
 冬浅し眠りたがらぬ足の裏
 洪谷 和江
 下城 雅子
 須貝 一青
 菅原 若水
 杉本青三郎
 鈴木 砂紅
 鈴木 久子
 鈴木 良二
 関根 瞬泡
 高木 一恵
 高橋 和彌
 高橋 姜子
 高橋つや子
 高橋由紀子
 多胡たかし
 田所魅沙絵
 田沼美智子
 田村 道子
 土田 信子
 寺井 むつ
 飛田 伸夫
 内藤ちよみ
 中岡 昌太
 中島修之輔
 中田 陽子

馬に念仏海鼠に進化論
 暗渠掘る水口に置く注連飾
 狐火や消えてはくれぬ言葉たち
 若輩の背鱗を攻める冬の水
 退院の重き一札注連飾
 竜の玉前に出るよと子を育て
 喧騒をすつぽり包むように雪
 住み馴れて海山遠く日向ぼこ
 冬立てり地軸の軋む音がする
 オリオン南中夜気やわらかにあなた居る
 冬の靄ビルは発射の構えして
 レノンの忌ギターに空洞ありにけり
 大噓満座の視線矢のごとし
 懐かしき鼻唄のあり大根引き
 死に仕度生き仕度して暦買う
 みかん転がる転がる先の新日常
 終の地と悟り冴聴いてをり
 神宮の杜のベンチの冬の蜂
 誰か来てくしゃくしゃにする枯芙蓉
 一滴の目薬命 中冬 青空
 父ほとほと困り果てたる懐手
 梟や眠りの淵に浮き沈み
 霜柱一步で崩す一夜城
 水鳥のような言葉を袂より
 箱根路の襷の意気地北吹いて

長濱 聰子
 中村 博子
 なつはづき
 西崎 久男
 根井 優花
 野村 洋子
 芳賀 陽子
 長谷 郷子
 長谷川昭放
 長谷川順子
 羽村美和子
 林 みさき
 原田 要三
 平山 圭子
 藤方さくら
 藤好 良
 星 由江
 堀田 福朗
 堀之内長一
 前田美智子
 増山 ちさ
 増田 陽一
 松崎 香苗
 松本 千花
 三浦 侃

第14回 現代俳句の風

梟の眼はあかつきの海の色
 遠人の手編みセーター花模様
 寒立馬風に詩人の耳もてり
 銃創を語らぬ父あり兜太の忌
 葱焼いて怒濤がひびく地酒の座
 初しぐれ遺言状はエクセルで
 サンタクロース赤い花から生まれけり
 八十路また楽しからずや返花
 裸木となりて恐るるもの無し
 鉄塔が踏んばつてゐる冬田かな
 毛糸編む逢はぬは生きてゐる証
 補聴器の冴拾う立話
 独り住む婆に三坪の冬菜畑
 熱気球誰も気付かぬ冬の空
 出会いがしらの綿虫と三輪車
 ひとまずは割ってみようか寒卵
 大木の裸木人を寄せつけず

水口 圭子
 宮崎チアキ
 宮下 奈緒
 武良 竜彦
 望月たけし
 森 光
 森村 文子
 柳澤 二重
 山口 富雄
 山下 遊児
 山中 未萌
 山本 弥生
 横川はつこう
 吉田 功
 米田 規子
 渡辺 澄
 渡辺 照子

葱 困ふ日当たりの良き畦の際
 老いてなほ青春と言ひ日脚伸ぶ
 宙ちゆうにあるしづかな意志や綿虫飛ぶ
 濡を曳く飛行機一機冬銀河
 枯野にて 雪降る今を 忍び生き
 一人居の自由不自由雪が降る

阿部仲童子
 石塚 吉江
 岩井かりん
 沖 裕子
 栗城 豊重
 近藤 美好

◎甲信越

山梨・長野・新潟

弥彦嶺の裾曳く里の懸大根
 来訪の時間刻刻ストーブ真っ赤
 白障子遺影七人閉ぢ込めて
 氣負ひたる指の先より冬に入る
 組板を修す冬日の匏屑
 消ゴムで消せぬ人生冬の虹
 着ぶくれて手足みじかくなりけり
 手は万能よ数へ日の夕厨

菅原あや子
 高山ゆう子
 中村 梨枝
 根橋 久子
 古川よし秋
 三石なるみ
 山田 一風
 吉川さが子

◎北 陸 富山・石川・福井

鰯起こし時空を越えて窓揺する
 肩叩く拳の強め十二月
 大枯野神社跡なる石ひとつ
 雪塊をなお積むダンブ漁り火点く
 だんまりを形にすれば大海鼠
 焚火果つ火の残像が胸の奥
 猫の尻を傍に雪夜の日記など
 蛇口出る水に皺あり冬厨
 大雪やてくてく歩く他はなし
 寒九の水あまたの壺にみだし置く
 一切の媚びを脱ぎたる冬木立
 癒えし身へ初春の風横付けける
 凹凸の生活たいらに雪降り
 花咲爺ふつと一息冬桜
 母娘にも時にせんなし隙間風

青木かよ子
 石田 悦子
 大倉 寿恵
 加藤 英一
 柄谷 せつ
 幹 自聲
 坂田 紀枝
 佐々木義雄
 漁 俊久
 高長 亜子
 津田 道代
 中田 良一
 野坂千佳子
 日合 英子
 藤坪 憲雄

第14回 現代俳句の風

書き出しは天気晴朗初日記
 マドンナの音頭で乾杯クリスマス
 マーメイドに像の退屈クリスマス
 ハツとしてホツともできぬ師走かな
 追伸のごとく降る雪師と別る

細野 千里
 松本詩葉子
 森野 稔
 山本 正雄
 吉塚三津枝

◎東 海 静岡・愛知・岐阜・三重

シルクスクリーン遺跡野に時雨来る
 雪こんこん紅バラ洋子という娼婦
 赤ん坊のひらがなで笑む福寿草
 凜冽の天地のあわい屋根の神
 田仕舞のけむりひとすぢ曲りけり
 ほつほつと地霊現はる春隣
 冬 芒光が放れ軽くなる
 白鷺の斜めに翔てり寒の川
 立冬の朝日に染まるマグカップ
 山茶花の白咲き易し散り易し
 帰り待つ何度もおでん温めて
 無心にはなれぬ哀しみ雪降り
 白炭の息 相部屋に病む者等
 風花や語ることなき物語
 牡丹雪人を無言とする力
 ユーラシアの嚏だった流水
 母喰らふ『切腹最中』十二月
 猪をにくまず己のおるかさを

秋本恵美子
 石川 義倫
 伊藤 清雄
 稲葉 千尋
 今井 真子
 岩月優美子
 上村えつみ
 江黒 愛子
 太田 風子
 大堀 祐吉
 笠井かず枝
 加藤 幸子
 金子 ユリ
 川嶋安起夫
 如月リエ
 北邑あぶみ
 木村 晴代
 くにたみつる

戦しか知らぬ子のゐる大冬野 近藤 喜子
 絶対には泊まりたいのよ 鷗高音 佐野 美江
 惜しみつつ日めくりはがす師走かな 高橋たき子
 裸木やまたやり直すだけのこと 竹内千賀子
 冬ざるるそろる猫になろうかな 田中 玲子
 葛湯吹くさてわたくしにできること 辻 まさ野
 はばかりず闇の深みへ咳こぼす 東城 保子
 白黒黄みんな肌色冬木の芽 中村 道子
 十二月八日の空の白い月 貫名ともみ
 白障子映る影絵や追う記憶 浜田 唯明
 ふんばりて大根力と戦ひぬ 林 弘
 マスクの中結界といふ疎外感 久田 洋子
 雪載せし伊吹が西に力瘤 藤尾 州
 冬の蝶止まりて荒き息づかひ 藤森 貞子
 微笑仏ピンナップして冬の壁 牧田 治子
 誤解曲解北窓を塞ぎけり 水岩 瞳
 風の駅春待つやうに列車待つ 宮田かつこ
 文庫本バベルの塔とし寝正月 村上 豪
 四日はやパウルクレーに夕刊来る 森 千恵子
 完璧といふ曲線の寒卵 矢橋 郁子
 信じたし今は寒燈程の距離 山田 哲夫
 サーカスの幟まき上ぐ空風 雪竹 紀子
 細雪まっ赤な服の人が来る 渡邊 淳子

◎ 関 西

滋賀・京都・大阪・兵庫
 奈良・和歌山

第14回 現代俳句の風

木枯しやリュックに入れし辞書二冊 秋山 節子
 ちちと撞きははと引きたる除夜の鐘 池田 潤治
 釘抜いてもらふ勤労感謝の日 井上菜摘子
 凍鶴になりかかりたる老夫婦 岩成 天風
 スマホへの嵌まり眸狐火みたよな眼 えのもと有裕じ
 冬紅葉今日の日記に足す一句 大谷 茂樹
 石路の花子を産み育て忘れけり 岡本 晴美
 甲子園の銀傘のもと成人式 尾崎恵美子
 大公孫樹天から枯れて天を指す 鬼形 聰彦
 雪超えて天才のメリット踏む 葛城 広光
 冬星や聞えるはずの無き汽笛 上村 春子
 福引や一つ撥ねたる玉の色 神成 桂子
 ガチャ玉を差して靴下繕へり 北村武衛門
 崖を負ふ冬木の桜風耀ふ 熊澤やすを
 老境という輝きの枯木立 五井 明美
 天界の曼陀羅かくや寒星座 小西 月舟
 影踏みのおの張りに切る小春かな 木挽 康春
 枯れのなか風の隣りに坐りけり 鷺山 珀眉
 水仙の千万の目に陽の滴 さざなみ悠子
 生き方と似たる楷書で書く賀状 佐野 玲子
 初稽古虎の舞う芸愉快なり 忍 正志
 一つとて同じ顔なき枯蓮 下 孝裕
 看板の少し冷たき奈良の色 十河 智
 冬空を作り直すよミキサ―車 高木 水志
 木枯や誓子旧居に海望む 田寺 玲子

冬眠をするのし ないのお父さん	米岡隆文	楼蘭のミイラ となりぬ雪女	横田明美	風花や現世剥 落しつつあり	山本左門	此処からはふ るさとの川大 冬木	山田由紀子	ジャム瓶の蓋 の硬さよ冴え 返る	山崎篤	行く年や夢の 辺に啼くジン タ	森本突張	綿虫に自我も 蘇鉄も青青と	森澤程	辛の字に一足 せば幸春どな り	森一心	アールヌーヴ オー展枯葉鳴 る出窓	峯悦子	病むひとの 声の高ぶり 冬董	光末紀子	耳奥のやま ないカノン 寒夕焼	毎原祥子	歳晩のあふ る絵馬や神 の黙	福森順子	任天堂白亜 の本社月お ぼろ	廣川孝彦	混迷の世や 寒鱈に塩を ふり返る	頓宮れい	かの丘の寒 疎林ならふ り返る	花谷清	茗荷祭の幟 社に農を問 う	西村尚子	松爆ぜて一 気呵成やど んど焼	西川由紀子	厨子の扉の ゆるく閉ざ さる小六月	中村光影子	暮雲なお光 をまとい冬 日落つ	中川富美	木枯しやひ いばあちゃん の団子汁	富田潤	何もなき日 の消火器へ 冬の薔薇	戸川富士子	数へ日や雨 きて余白消 してゆき	辻本俊子	持佛抱く吾 諸葛菜の風 の中	樽谷宗寛	ハミングは ひとり伴奏 は虫時雨	田山嘉容	何をしても 寒い夜があ る	谷川すみれ
--------------------	------	------------------	------	------------------	------	------------------------	-------	------------------------	-----	-----------------------	------	------------------	-----	-----------------------	-----	-------------------------	-----	----------------------	------	-----------------------	------	----------------------	------	----------------------	------	------------------------	------	-----------------------	-----	---------------------	------	-----------------------	-------	-------------------------	-------	-----------------------	------	-------------------------	-----	------------------------	-------	------------------------	------	----------------------	------	------------------------	------	---------------------	-------

第14回 現代俳句の風

露の世の旅路 やここに最終 章	妙田節子	宅配便師走 の風を置いて ゆく	三野公子	朝寝してこ つんと睦月 につきあたる	榎田敦子	日向ぼこ んなあなた も受け入れて	藤本陽子	地方史誌に 生家の写真 日脚伸ぶ	藤井久代	黒豆の仕上 げの一煮大 晦日	林万理子	その下は般 若の面かマ スク取る	沼本養卯	手をつなぐ やうに形見 の手袋を	中田七重	列車過ぐ寒 夜の闇を揺 らしつゝ	千々和美 佐子	幾重にも白 馬駆けくる 冬怒濤	竹本チエ 子	連弾の街角 ピアノ冬ぬ くし	高堀煌士	一月の一の 字重く座り けり	三軒鼻恭	空仰ぐため に鳥来る冬 木かな	河野悦子	凍滝や地球 の鼓動閉じ 込めて	國富柿方	ほんのりと 薄茶の甘み 一葉忌	河村加南 子	くたくたと 魂抜けて行 く冬日和	茅野昭恵	メタリック の冬木そろ そろ旅立つ か	門井千歩	うたたねの 老いの夢想 や竜の玉	太田淑子	冬日燦ぐる りんバスは 病院前	井原三都 子	雪の客地団 駄踏んでか ら上がる	伊藤晃彦	木の葉髪夫 の後ゆく京 都かな	池上栄実 子	長男の嫁と 目の合ふ嫁 が君	秋岡宣子	日向ぼこ此 の世の足が 浮いてゐる	渡邊美保
-----------------------	------	-----------------------	------	--------------------------	------	-------------------------	------	------------------------	------	----------------------	------	------------------------	------	------------------------	------	------------------------	------------	-----------------------	-----------	----------------------	------	----------------------	------	-----------------------	------	-----------------------	------	-----------------------	-----------	------------------------	------	------------------------------	------	------------------------	------	-----------------------	-----------	------------------------	------	-----------------------	-----------	----------------------	------	-------------------------	------

◎中国 鳥取・鳥根・岡山・広島・山口

海峡は龍の動脈冬ざる 保田 尚子

◎四国 徳島・香川・愛媛・高知

綿虫や夕星^{ゆふぼし}待たる西の空 青木 慧

冬の雷尻餅ついた大悲鳴 市原 光子

吉良の忌や牛乳の膜吹いてをり 今岡 直孝

北風や私を連れて行かないで 大住 孝子

土俵入り日の丸つけて堂々と 大広 仁

枕木を照らす寒灯男の足 金井 令子

花のごと雪ふりにけり臙脂の父 河田 清峰

せんだん草の棘の行列軍手ごし 佐藤 稚鬼

嬰の髪撫でて被せる冬帽子 高木 満智

山眠る村の十戸の灯を抱き 徳弘賀年子

母のそれからミシン奏でる冬銀河 中野 佑海

てのひらをこぼるる刻よ冬すみれ 野崎 憲子

妻の座もときに疎まし冬桜 浜田 京子

タクシーに告げる行先冬銀河 布戸 道江

卒寿冬歩ける食べる論議もする 松木ヒサ子

シヤガールの女空舞うクリスマス 三好真由美

半世紀続く親交賀状書く 山口 晴子

綿虫とわたくし比べあう水位 油津 雨休

◎九州 福岡・長崎・佐賀・熊本・大分・宮崎
鹿児島・沖縄

いたくないかたち眠る夜の寒 相川 文子

アカンペー舌の体操大晦日 あべまさる

第14回 現代俳句の風

冬晴や健康な齒の遺骨達	池宮 照子
木枯しや基地へ鳥の逆さ落ち	伊波とをる
寒晴や土の匂いの風探す	浦 廸子
煖炉の火胸の痛みをあたためよ	小川 裕子
手帳見る十一月の焦燥	梶原 敏子
耳鳴りは看護疲れか冬に入る	具志堅忠昭
裸木を叩くや骨の音すなり	上月 大輔
鳥獸の吐息被曝の枯木立つ	小谷 一夫
寒月や虚言をチョコでコーティング	田中 充
数え日を数え直してなにもせず	玉木 涼花
冬耕や泥の文明吾がまほら	渡嘉敷敬子
さみしさを刻む白葱までの距離	中島 勝子
疲れ果て永眠などと夢を見る	長友 巖
鎮魂の摩文仁の丘は時雨けり	夏木 久
冬ざれてスナフキンの帽子とび	百名 温
骨抜きし鮫を吊して年の暮	平安山あや
冬枯れを楽しんでいる足の裏	前川 弘明
来し方にこれから十歳冬紅葉	三船 熙子
紙漉の行つたり来たり暮れゆけり	村井 良永
冬木立忘れたはずの下駄の音	矢野二十四
冬濤や墓参のように鯨句碑	山本 悦子
	吉村 豊

感銘の一句

石井 眞

闇汁のブラックホールへ箸を入れ 渡部 陽子

闇汁の比喩にブラックホールを使用するとは驚くばかりである。確かに、二つとも何でも飲み込むし、闇汁で時を忘れて楽しむのも、ブラックホール近辺では時が遅くなる事象に似ているとも言える。箸を入れることにより、闇汁の全てが人間の胃袋に入るわけだから、結局、人間の胃袋がブラックホールなのだ。正に、人間の胃袋恐るべし。

感銘十句抄

身を証すものを問はるる枯野かな

稲吉 豊

冬田より平城京を掘り出しぬ

斉田 仁

寒鯉の浮きも沈みもせぬ力

渋谷 和江

ひとり逝きふたり逝きして雪残る

菅原 若水

霜柱一步で崩す一夜城

松崎 香苗

八十路また楽しからずや返花

柳澤 二重

手は万能よ数へ日の夕厨

吉川さが子

凹凸の生活たいらに雪降れり

野坂千佳子

裸木やまたやり直すだけのこと

竹内千賀子

雪の客地団駄踏んでから上がる

伊藤 晃彦

感銘の一句

川口 花芯

白障子映る影絵や追う記憶 浜田 唯明

障子に影絵は、とても懐かしく感じます。障子の影絵の正体は何だったのか。月明かりで見たものなのか、それとも偶然に人影が映ったのか。見方によつては、とてもメルヘンチックな光景でもある。作者は、その影絵から、いろんなことを思い、たどり着いたのはどこまでの記憶なのか、その様な時を持てたのは宝の時間だったに違いない。

感銘十句抄

文鎮に静かな重さ雪の夜

大河原倫子

闇汁のブラックホールへ箸を入れ

渡部 陽子

沢庵の石の重たき考の声

網代奈津江

若水を掬へば光る生命線

石原 玲子

手漉和紙積み上げ共に年を越す

大竹 照子

手袋の握手あなたの手でしょうか

田沼美智子

霜柱一步で崩す一夜城

松崎 香苗

凹凸の生活たいらに雪降れり

野坂千佳子

信じたし今は寒燈程の距離

山田 哲夫

海峡は龍の動脈冬ざるる

保田 尚子

「現代俳句の風」秀句を探る

感銘の一句

廃校を二つも抱き山眠る

衣川 次郎

大石 文雄

山眠るとは、一見のどかで平和な状態を思わせる。統廃合により、山間にある学校が、二つも廃校となった。日本のどこにでもある情景となつてしまい、今や限界集落も多々出現している。高齢化も急激に進んでいる。そういうのかさの隅にある、厳しい冬を迎える山村の現実を浮きぼりにした。

感銘十句抄

隙間風とぼけたスキマ今どこへ
寒梅やどの音符から上を向く
為政者の驕り戒む除夜の鐘
井の中の平和を灯す聖夜かな
三寒のかくれどころのなき大樹
俳人に洗脳されている海鼠
ムンク展風邪の男が紛れ込む
鳥の来る枯木が老の理想なり
狐火や消えてはくれぬ言葉たち
大木の裸木人を寄せつけず

川名つぎお
山本 敏倅
青島 哲夫
黒川由紀子
塩野谷 仁
内藤ちよみ
中岡 昌太
中島修之輔
なつはづき
渡辺 照子

感銘の一句

帰り待つ何度もおでん温めて

東海 憲治

笠井かず枝

主婦の方なら日常の生活に経験されることだが、煮込むほど味の染むおでんだからこそ佳句になった。中七の「何度も」に日暮れの早さ、風の音に不安が募り家族への思いが沁みて来る。おでんの湯気が冷えた体を包み、揃つた家族の笑顔も浮かんで暖かい家庭に暖かな句が生まれた。おでんを囲む度、私はこの句を口吟むことだろう。

感銘十句抄

文鎮に静かな重さ雪の夜
廃校を二つも抱き山眠る
風紋てふ風の轍や磯時雨
若水を掬へば光る生命線
鳥の来る枯木が老の理想なり
凹凸の生活たいらに雪降り
山茶花の白咲き易し散り易し
惜しみつつ日めくりはがす師走かな
裸木やまたやり直すだけのこと
風の駅春待つやうに列車待つ

大河原倫子
大石 文雄
中田とも子
石原 玲子
中島修之輔
野坂千佳子
大堀 祐吉
高橋たき子
竹内千賀子
宮田かつこ

感銘の一句

豊田 級衣

手と足を伸ばす勤労感謝の日

石口りんご

すつきりとして明るくおらかな好句です。一読して「うんうん」と頷きました。

手と足を伸ばせば自然に呼吸が楽になり、仕事がスムーズに運びます。良い仕事ができれば働く喜びが増します。この日は、働く者同士がお互いに感謝を示す日です。今年も後僅かです。明日へと前を向いて頑張りますよう。

感銘十句抄

こだはりを持ちたる暮し枯蟻螂	片倉 弓
笑いながら老いていくなり寒北斗	小高 沙羅
軒先に何んでも吊し冬に入る	高橋 和彌
大雪やてくてく歩く他はなし	漁 俊久
風の駅春待つやうに列車待つ	宮田かつこ
生き方と似たる楷書で書く賀状	佐野 玲子
一つとて同じ顔なき枯蓮	下 孝裕
一月の一の字重く座りけり	三軒鼻 恭
冬晴や健康な歯の遺骨達	伊波とをる
冬木立忘れたはずの下駄の音	山本 悦子

感銘の一句

菱沼多美子

風花や語ることなき物語

川嶋安起夫

語ることなき物語。このフレーズが作者の奥床しさを伝えている。こんな嬉しいうことがらは自分の胸にしまっておこう。誰も知る必要はない。そう感じる作者のみちたりた姿。季語風花によって明るくはかないイメージが喚起されるのも好ましい。すばらしい俳句に感謝している。

感銘十句抄

笑いながら老いていくなり寒北斗	小高 沙羅
行く年を黄の点滅の中にいる	高野 公一
寒梅やどの音符から上を向く	山本 敏偉
雨音の朝まで続く開戦日	植田いく子
弁当を待つ母子の列クリスマス	金子 泉美
太陽のこぼれ膨らむ冬の海	佐藤 廣枝
白障子開けてやんごとなき自由	鈴木 砂紅
住み馴れて海山遠く日向ぼこ	長谷 郷子
出会いがしらの綿虫と三輪車	米田 規子
長男の嫁と目の合ふ嫁が君	秋岡 宣子

図書館俳句ポスト

九月投句結果 題「露」

選者―太田うさぎ・寺澤一雄・渡邊樹音

特選

能代市立能代図書館

白露や寄れば寄り来る牧の山羊

岸部吟遊

愛らしい山羊である。足下の露の白さは山羊の毛並みだけでなく純朴さの象徴でもある。

桶川市立中央図書館

青空を大きく掬ひ蜻蛉捕る

増田信雄

「大きく掬ひ」の表現がダイナミックで、空の広さと高さがよく伝わる。爽快な一句。

浜松市立中央図書館駅前分室

鉾山の扉は固し露律

尾内以太

危険防止のため施錠された扉。手前の草叢も廃坑を封じるように茂る。「露律」が哀切。

函館市中央図書館

佳作 川釣のポイントはここ沢胡桃

田川管子

入選 夕焼けの色の桃の実四つ買う 銀子

白靴で翔べる立待岬かな 青屋黄緑

秋晴れや開店を待つ焙煎機 松浦学

能代市立能代図書館

佳作 太き字で木箱の林檎送り来る

戸田佐江子

販売の青菜や今朝の露つけて

入選 青池の底は藍色秋澄めり 布施鷹夫

露に座す庚申塚の彫深し 佐藤君子

桃食うて肘から汁を滴らす 浅田英夫

朝稽古露のサドルを拭く剣士 今野淳風

水戸市立見和図書館 三浦静佳

入選 ゆきあいの空入道と颯雲 武藤節子

入選 白露に空の蒼さを移しけり 大森薫

真岡市立図書館

入選 露の世のベンチの影の長さかな 小川充

さいたま市立大宮図書館

佳作 売店のだるま弁当秋の山 木村るみ子

入選 全身に露集めたる散歩犬 大橋朋子

床を掃き棚を拭きたる露の朝 益田千聖

芋の露ちつちやな地球のせてをり 落合秀行

コスモスの束をたすさえ誕生日 白石千代子

入間市立図書館西武分館

佳作 茶の花や遠くに富士の見える里 長澤健次

入間市立図書館金子分館

佳作 秋うらら肝心なもの買い忘れ 砂狐

入選 花柄のシャツ着こなして生身魂 長沢おさむ

退屈をまぎらわすため露をみて 大野美波

入間市立図書館藤沢分館

入選 身一つの遍路の胸にある位牌 内藤正人

新座市福祉の里図書館

佳作 露の世や何も要らぬと言ひながら 藤本みどり

入選 芋の露三粒揺れつつ集合す 柴崎光生

鎌倉街道馬頭観音笹の露 小沼米子

古酒に酔ひ聞こえぬ振りの地獄耳 高橋サク子

久喜市立栗橋文化会館図書室

佳作 露時雨校にある校歌かな 喜多智恵子

桶川市立中央図書館

佳作 町選る気象情報聞き乍ら 金子恵子

廃線の錆びた鉄路や露律 木村隆夫

この石も地球のかけら露の玉 寺井むつ

入選 正解のなき途中下車賢治祭 山口流離

横笛の一管透る月今宵 須賀遊子

桶川市立桶川図書館

入選 野分晴れカレライスを待つばかり

野原虎ヶ岡

桶川市立坂田図書館

佳作 露を置く十坪の庭のただ静か

小林茂之

新宿区立戸山図書館

入選 地蔵小屋枝重きこと石榴の実 とみこ

江東区立東大島図書館

佳作 首塚に手向けし花や朝の露

長谷川余生

江東区立東陽図書館

入選 露の世の夢の途中で起こされて

佐藤あきえ

豊島区立目白図書館

入選 画数の多き漢字や菊日和 葛巻正樹

豊島区立池袋図書館

入選 荒草の露にふれつつ朝の道 矢尾一枝

江戸川区立中央図書館

佳作 赤とんぼ集ふ住宅展示場 中村隆雄

江戸川区立葛西図書館

佳作 ふるさとの夜は饒舌芋の露 山内健治

江戸川区立篠崎図書館

入選 天高し献血室のドアを押す 近藤精一

曼殊沙華みんなおんなじ背の高さ

新井よね子

立川市錦図書館

佳作 消息は問わぬ仲なり男郎花 堀江孝晴

入選 露降りる瘦せ猫のある河川敷

石井百合子

寝るときに少しきになるせみの声

ラブリシエル

竹めば朝日に花野色を増し 中川紀子

また中止なにもなくなる夏休み

リリー

立川市高松図書館

佳作 吾よりもミシン軽やか秋日日和

牟田英子

入選 秋風や固き旧家の通し土間

佐藤幸子

立川市西砂図書館

入選 露の手をエプロンに拭き菜をきざむ

坂内タミ子

寒川総合図書館

入選 小春日や釣り銭忘れ教えられ

吉田和男

入選 露草と学童帽と空の色

佐藤志津江

燕市立図書館

入選 腹痛の夜を台風の過ぎて行く

奥山とも女

無花果のたわわに実る空家かな

高橋さらら

浜松市立流通元町図書館

入選 露葎怒りしずめる為にくる

袴田一博

浜松市立中央図書館駅前分室

入選 妹と父のことなど銀河の夜 小山えつ

浜松市立三ヶ日図書館

入選 白露を置く氏神の万度石 中嶋克明

高山市図書館「煥章館」

佳作 桃青忌籠に収める飛驒りんご 床臥

入選 エレジーの如く野に揺れ吾亦紅 卯筒

高山市図書館一之宮分館

佳作 露けしや使い古しの庭蓆 役田八重子

大阪狭山市立図書館

入選 ひと跳ねを追へば蟻螂草の国 春陽

東広島市立中央図書館

入選 ぼつぼつと背におなもみ子ら帰る 馬場潤子

徳島市立図書館

佳作 群れたがる羊も人も白露も 山田絵里

入選 柚子味噌や里に青年迎えらる 森井哲也

行橋市図書館

佳作 朝採りの露の滴る野菜籠 伊藤立恵

長崎市立図書館

入選 花芒去来の句碑は東向き 池辺ふみ

細路地の鳥居潜れば秋の声 小原達朗

秋の空丸ごと雲の展覧会 上戸真弓

日田市立淡窓図書館

入選 露しぐれ観音堂で待合せ 一瀬祥子

豊後高田市立図書館

入選 露けしや埴輪の船にピアノ線

出水市立中央図書館 小野道山

入選 天高し飛行機雲を指で追う 鶴姫

地区協だより

富山地区篇

森川 敬三

―次の十年―

富山県現代俳句協会では、三月の春季俳句大会、九月の秋季吟行俳句大会、夏と冬二回の会報発行を毎年、毎号欠かさず行ってきました。ところが、春秋の大

会は、二〇二〇年からのCOVID-19の流行によって紙上大会に切り替えたり大会自体を取り止めたりしなければならなくなりました。この切替えや取止めは、地区協会の存在意義に関わる重大な課題を顕在化させました。

その課題とは、地区協会と一人一人の会員との関わり方、繋がり の在り様です。これは、延いては協会の存在意義そのものにも関わる重要な課題です。結社やグループでは、対面例会ができなくなっても工夫して会を運営し活動を継続していきます。協会に比べて結社やグループは小

回りが利くという違いはあります。それとともに、会に対する帰属意識にも大きな違いがあります。課題、そして結社やグループとの違いが顕在化したことは、会員が地区協会に求めていること、地区協会が会員に提供できること、すべきことを顧慮・研究して事業を再構築するチャンスがきたととらえるべきでしょう。最近の協会の動きもこのチャンスを認識してのことでしょう。

富山県現代俳句協会では、毎年ジュニア俳句大会を催してきましたが、昨年の第十五回大会を最終回としました。俳句の未来を担うジュニアの育成はとて大切なことです。同時に、COVID-19で以前と同じようには活動できない地区協会として、会員の研鑽と交流の場をどのように維持発展させていくか、新会員発掘の場をどのように設けるかなども、重要急務の課題です。地区協会への帰属意識が低下しているのではないかと懸念される現在、そして会員の大幅な減少期に入った現在、これらの課題の解決なしには地区協会の活動は維持できません。そ

こで、富山地区協会では事業をリニューアルしたり新規事業を始めたりすべきだと考え、地区会員に対して新規事業の希望や企画を募集しています。

現代では結社やグループに所属せず、個人で俳句を楽しんでいる人も増えてきました。結社やグループに所属して一定程度研鑽を積み、それを踏まえて地区協会に入会するというこれまでの在り様とは全く異なる俳句人が増えていきます。この人たちに地区協会が研鑽や発表の場を提供して協会の活動に興味や関心をもってもらおう、そのようなことも考えていくべきときがきたとも思慮しています。

富山県現代俳句協会は、来年で創立三十周年を迎えます。また、来年は会場や運営を北陸三県で持ち回りにしている北陸現代俳句大会を富山で開催する年でもあります。このような節目の年を迎えるにあたって、富山地区協会員の一人一人の意識と行動力を結集し、次の十年の扉を開く契機としたいと希望しています。

新入会員記念作品

この指を離せば別れ赤蜻蛉
 一つ家にそれぞれの夜秋深む
 終電の居眠り客は新社員
 足元に笹百合二輪一揆の碑
 白袴履いて仕切れるどんだかな
 青芒これからといふあをさかな
 名は知らね花を残して草むしり
 起きてるかい聴いていますと初音かな
 緑陰や茶店の白き卓と椅子
 ごめんねと一言云えず振り花
 古地図には広き大川夏はじめ
 春の夜は手酌ぬる爛女歌
 あかつきの姉御のほぐす祭髪
 草笛や眠りを醒ますワイン蔵
 たとふなら海月の骨のやうな嘘
 抽斗に仕舞ひし手紙桐の花
 竹林に響く尺八半夏雨
 青田風山の懐吹き抜くる
 熟るるとは澄んでゆくことゆすらうめ
 満月や白きハイウェイ空に入る

石川 道子 東 海
 中野ひとし 東 海
 栗田 道弥 東 海
 ありぎりす 関 西
 佐藤 節子 福 井
 新井 孝磨 埼 玉
 森 美枝子 埼 玉
 榎鼻ことは 福 井
 千坂 平通 埼 玉
 小林 京子 埼 玉

唐茄を転がしてみる夕餉時
 鱒雲競り声遠し築地跡
 葱坊主ポトリと落ちて仏顔
 西瓜切る赤く真ん丸こそ平和
 八日目の蟬の微動や土に置く
 烏曇昨日を破ってゴミに出す
 落鮎の迷ひ込みたる三角洲
 魚捌く手元狂はす秋の雷
 畏れより始まるキャベツ渦の朝
 風が強いね月も洋梨も溶けた
 つぎつぎと春の名を呼ぶ健診日
 るるると遊ぶ日もある熱帯魚
 ほうたんの奔放を活く九谷焼
 片栗の花恥じらいて咲きにけり
 恋ごころふわりふわりと秋蜜
 台風的眼それ夫の忌日かな
 神の留守燃えたる究理隠しけり
 小春日のニューロン繋ぐ三輪車
 筋肉を鏡に映す憂国忌
 秋麗追いこす人のあと追わず

高瀬多佳子 都多摩
 望 東 京
 斎藤佳代子 神奈川
 笹本 啓子 埼 玉
 佐々木貴子 青 森
 奎 いう子 西九州
 佐川 順子 茨 城
 小門 則子 千 葉
 富士真すみ 東 京
 武田 和明 東 京

順着到

新刊案内 事務局

(二〇二二年十月二十日
整理分まで。但し、現代
俳句協会会員のみ。記載
漏れ等がありましたら事
務局までご連絡ください)

句集

『檸檬のかたち』 三輪初子
北海道在住「炎環」 朔出版

『短詩形言語空間的俳句Ⅱ』
桑鶴翔作

鹿兒島在住「形象」
ジャプラン

『歩一步』 脇村 碧
千葉在住「俳句留楽舎」
ウエツブ

『焉』 川名つぎお
東京在住「豈」
現代俳句協会躍動4期・I

『その前夜』 井口時男
神奈川在住 深夜叢書社

『山は秋』 角田大定
東京在住

『青岬』『こんちえると』
文學の森

『蓮の糸』 安徳由美子
福岡在住「自鳴鐘」

『永字八法』 星野和葉
埼玉在住「水明」

『あきる野』 伊丹啓子
東京在住「青群」 沖積舎

『牽牛花』 安永一孝
山口在住「草樹」「其桃」
文學の森

『夕焼空』 本田 巖
群馬在住「翡翠」 文學の森

『三年』 関根道豊
埼玉在住「こんちえると」
牛歩書屋

『一巡』 小栗貴美子
群馬在住「鳥語」 文學の森

俳画集

「現代俳句」 電子版購読のご案内

電子書籍オンラインストア「Reader Store」において、『現代俳句』電子版を協会員に無料でご提供できることになりました。

【事前の利用者登録】

ご利用のためには、事前に「Reader Store」(<https://ebookstore.sony.jp/>)で利用者登録が必要です(登録無料)。画面右上の「無料ではじめる」から利用者登録できます。なお、Google (Gmail)、Twitter、LINE、Apple IDを普段お使いの方は、利用者登録が簡単になります。

【無料クーポンの登録】

「現代俳句」電子版を無料で閲覧するには、当該号の協会員限定クーポンの登録が必要です。クーポンが登録されると、自動的に本棚に当該号が入ります。下記のページからクーポンを登録してください。

<https://bit.ly/3Tl9Yuz>

QRコードからもアクセスできます。

その他、クーポンコード：LMNQSVSUECQNをご入力いただく方法もございます。詳しくは、協会HPをご覧ください。

<https://gendaihaiku.gr.jp/learn/gendaihaikudenshiban/>



● 逝去謹悼 ●

窪田タカノ	愛 媛	R 4・9
若林 常雄	神奈川	R 4・9
川島 典虎	神奈川	R 4・8
福原 暁	神奈川	R 4・9
河野 泉	大分	R 4・9
暮田ちうま	東京	R 4・10

◇ 訂 正 ◇

左記のとおり訂正してお詫びいたします。

『現代俳句』 10月号

「列島春秋」 6頁上段

正 外来種の菊捨つべしと役場指示

東海林光代

誤 外来種の菊捨つべしと役場指示

東海林光代

◇ お知らせ ◇

現代俳句協会事務所は、年末年始に左記のとおり冬季休暇をとらせて頂きます。

記

十二月二十四日(土)より

一月 五日(木)まで

○ 編集室より ○

ラグビーの渦潮とけて奔りいづ 水原秋櫻子
二〇一九年に日本でラグビーWカップの大会が開催された。日本対アイルランド戦の決戦の直前に猛者達のミーティングが開かれた。聞き耳を立てたくなるのも人情、日本チームのジョセフヘッドコーチが選手にワンチームになるよう英語による自作の五行俳句を披露した。

その訳は以下の通り―

誰も勝つとは思っていないし

誰も接戦になると思っていないし

誰も僕らがどれだけ

犠牲にしていたのか分かんないし

信じているのは僕たちだけだ

と詠って選手を鼓舞した。その英語による五行俳句を聞いた日本選手は「いろいろのことを思い出し、やってやろう」と奮い立つたという。外国籍をもつ選手も日本のために闘った。結果大団アイルランドを19対12で破り世界に衝撃を与えた。日本国中が歓喜に沸き、世界中がスポーツを堪能、平和な一日でもあった。

その後ロシアとウクライナとの国境戦争が勃発、世界が恐怖のどん底に落とされた。英領北アイルランドとアイルランドの国境線をブリスウォール(平和の壁)という。平和を求め合う心が今問われている。本年も大変お世話になりました。謹んで御礼申し上げます。皆々様の御健勝とよいお年になりますようお願い申し上げます。(長井 寛)

『現代俳句』・12月号・684号

令和4年(2022年)11月25日印刷

令和4年12月1日発行

発行人 後藤 章

編集人 長井 寛

発行所 現代俳句協会

〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-5-4

倍楽ビル(外神田)7階

電話 03-3839-8190

FAX 03-3839-8191

振替 00160-6-52603

頒 価 600円 会員以外の購読料 半年分 3,600円 1年分 7,200円(送料共)

(URL) <https://gendaihaiku.gr.jp/>

印刷所 日本ハイコム株式会社

〒399-0651 長野県塩尻市北小野 4724

俳句雑誌案内

もっと俳句を!

俳句は出会いの文学です。
良き俳句、良き仲間と出会い、
あなたの俳句にフレッシュな感動を!!

現代俳句協会

(掲載ご希望の結社・同人団体は、協会事務局までご一報下さい。)

<p>好日</p> <p>主 宰 高橋 健文</p> <p>誌代 1月 1000円 1年 12000円</p> <p>〒270-0007 千葉県松戸市中金杉 2-78</p> <p>好日俳句会</p> <p>電話 047-713-6495 振替 00250-1-141278</p>	<p>季刊俳句同人誌</p> <p>天晴 tensei</p> <p>代 表 津久井 紀代 編集長 杉 美春</p> <p>新しい作家を繋ぐ発表の場 「実」のある小誌をめざす</p> <p>誌代・年会費 1万円 〒180-0003 東京都武蔵野市 吉祥寺南町 3-1-26 佐藤方 津久井紀代 電話・FAX 0422(48)2110</p>	<p>青 岬</p> <p>主 宰 衣川次郎</p> <p>誌代 (送料共) 半年 六〇〇〇円 一年 一二〇〇〇円 (送料共)</p> <p>〒243 0413 海老名市国分寺台四十二番一六 青岬発行所 衣川次郎 電話・FAX 〇四六―三三―三九三三 振替 〇〇二九〇―一―一〇二三二七</p>
<p>蛮</p> <p>主宰 鹿又 英一</p> <p>会員それぞれの個性・多様性・ 同時代的態度を尊重する。</p> <p>季刊・誌代 1年 6000円 雑詠出句六句</p> <p>〒221-0814 横浜市神奈川区 旭ヶ丘 5-18 鹿又方</p> <p>蛮の会</p> <p>電話/FAX 045-491-5745 メールアドレス eichan6@gmail.com 振替 00290-1-114640</p>	<p>玄鳥</p> <p>主宰 岡部 榮一</p> <p>雑詠出句 七句</p> <p>誌代 1部 1000円(送料共) 半年 6000円(送料共)</p> <p>☎657-0862 神戸市灘区浜田町 1-2-17 Ⅲ904 年清彰雄 方</p> <p>玄鳥俳句会</p> <p>振替 01100-1-7162</p>	<p>秋</p> <p>石原八束提唱の内観造型の理念を追求</p> <p>主 宰 佐怒賀正美</p> <p>誌代(送共) 一冊 一四〇〇円 一年分一四〇〇〇円(十冊)</p> <p>〒166 0001 東京都練馬区小竹町一四四一八 秋 発 行 所 FAX 〇三六七六〇―九八七三 振替 〇〇二〇一四七八二〇七秋俳句会</p>

俳句雑誌案内

<p>季刊俳誌</p> <h2>牧</h2> <p>代表 仲寒蟬</p> <p>〒160 0022 東京都新宿区新宿二一五六一 オリエント新宿二〇一 木村晋介法律事務所内 「牧」発行所 木村晋介 FAX 〇三三三三二五五七 Mail:office@kimura-law.jp</p> <p>年会費 一、二、〇〇〇円</p>	<p>素朴・単純・平明にして深みのある句を。 師系 加藤楸邨・原田喬・九鬼あきえ</p> <h2>雅</h2> <p>主 宰 村松二本</p> <p>誌代 一年 一、二、〇〇〇円（送料共） 〒434 0016 浜松市浜北区根堅 一九九三五 太田依子方 「雅」発行所 振替 〇〇八五〇一四一三三〇八</p>	<p>自由句会誌</p> <h2>祭演</h2> <p>主 催 森須 蘭</p> <p>互いに切磋琢磨出来る場を 季刊 雑誌七句 同人互選評 誌代 年間 4000円 〒276-0046 八千代市大和田新田 1004-4 宮坂 方 森須 蘭 TEL 047-409-8152 FAX 047-409-8153 E-mail morisuranran8@gmail.com</p>
<p>通信俳句濃信</p> <p>(月刊)</p> <p>主 宰 佐藤 文子 編集長 奈都 薫子</p> <p>誌代 一部800円（送料含む） 発行所 〒390-0804 松本市横田1-28-1 信濃俳句通信社 TEL 0263-32-0320 FAX 0263-32-8332 振替 00560-1-48800</p>	<p>名譽主 宰 山崎 聰 主 宰 米田 規子</p> <h2>響焰</h2> <p>誌代 一年 一、二、〇〇〇円（送料共） 〒245 0015 横浜市泉区中田西 三一三五一一六 米田方 「響焰」俳句会 電話 〇四五七八〇二七九一七 振替 〇〇九六〇一五一三三二二〇</p>	<p>藍</p> <p>主 宰 花谷 清</p> <p>雑誌出句 六句（月刊） 誌代 一部一〇〇〇円（送料共） 〒603 8805 京都市北区西賀茂蟹ヶ坂町一三二一三 「藍」俳句会 電話 〇七五―四九二―六五五三 電話 〇〇九六〇一五一三三二二〇</p>
<p>雑詠出句 五句 誌代 半年 六、〇〇〇円 一年 一、二、〇〇〇円</p> <h2>陸</h2> <p>主 宰 中村 和弘</p> <p>〒174 0056 板橋区志村二一六―三三―一六六号 「陸」俳句会 振替 〇〇一九〇一七―一七八〇一九</p>	<p>代表 花房 八重子</p> <h2>縹</h2> <p>誌代 一年一〇、〇〇〇円（隔月刊） 〒700 0903 岡山市北区幸町一〇―一五〇―一七〇八 「縹」俳句会 電話・FAX 〇八六一二三八―一七―一八二 ゆうちよ振替 〇二三二〇一四一〇一〇三三六</p>	<p>庶民の詩</p> <h2>ひまわり</h2> <p>師 系 白田亞浪・角川源義 主 宰 西池みどり</p> <p>誌代 一年間 15,000円 〒779-3116 徳島市国府町池尻 47 ひまわり発行所 電話 088(642)1406 振替 01670-7-50</p>

伝統を継承し俳句の新領域を開拓する

波

主宰・山田 貴世

誌代 六ヶ月 六、〇〇〇円(送料共)
一年 一、〇〇〇円(送料共)
〒251-0875 藤沢市本藤沢一八七七 山田方波俳句会
電話FAX 〇四六六―八二一六―一七三番
振替・〇〇二六〇―一七一九〇六〇
HPは「波俳句会」で検索

水明

主宰・山本鬼之介

誌代 半年 六、〇〇〇円(送料共)
一年 一、〇〇〇円(送料共)
〒330-0084 さいたま市浦和区岸町四一〇二二
水明俳句会
電話 〇四八―八二一―四七四―一番
振替・〇〇一七〇―一―九二三―九三

加里場

句は心

季刊 師系 石原 八束

主宰 井上 論天

年会費 一〇、〇〇〇円
通信句会費 四、〇〇〇円

〒798-0037 宇和島市丸穂町一丁目三一七
電話FAX 〇八九五―二八―一六〇七六
加里場発行所
振替 〇二六〇―一―五五八―九五

草樹

師系 桂 信子
代表 宇多喜代子

誌代 半年 6000円(送料共)
一年 12000円(送料共)

〒248-0025 鎌倉市七里方浜東 3-25-11
渡辺和弘方

草樹発行所

振替 00200-9-83323

あすか

主宰 野木 桃花

誌代 1年 12000円(送料共)

〒235-0036 横浜市磯子区中原 2-5-10

あすか発行所

電話 045-771-0992

振替 00190-3-79948

暖響

師系 加藤 楸邨
雑誌欄選者 江中 真弓
編集長 川村 研治

誌代(送料共) 半年 7200円
1年 14400円

発行所

〒344-0038 春日部市大沼 2-71-131
高橋邦夫方

暖響俳句会

振替 00190-9-451223

電話/FAX 048-747-5606

麦

師系・中島 斌雄
会長・対馬 康子

出句 七句
誌代 半年 六、〇〇〇円(送料共)
一年 一、〇〇〇円(送料共)

〒343-0026 越谷市北越谷三十二一六
麦の会

電話・〇四八―九七五―一八七二五
振替・〇〇一六〇―一六〇―六八三

軸

主宰・秋尾 敏

雑誌出句 七句
誌代 一部 一、〇〇〇円(送料共)
一年 一、〇〇〇円(送料共)

〒278-0005 野田市宮崎九五
軸俳句会

電話 〇四七―二二―三九二番



俳句雑誌案内

<p>幻 げん</p> <p>〒636 0141 奈良県生駒郡斑鳩町 稲葉車瀬「1」100 月例会は第一土曜日午後一時から 奈良県文化会館にて開催 入会随時</p> <p>隔月刊 購読料一ヶ月 三〇〇〇円 電話〇七四五―七四一―〇八三四 振替〇一〇九〇―二二一九八七六</p> <p>冒険をおそれず、個性を活かし 斬新な詩情の探求と表現を 目指す</p> <p>幻俳句会 主宰 西谷 剛周</p>	<p>定型と季題 内蔵するもの豊かな句</p> <p>京鹿子</p> <p>主宰 鈴鹿 呂仁</p> <p>誌代 1年 12000 円(送料共) 京鹿子発行所 〒606-8313 京都市左京区吉田中大路町 8-1 野風呂記念館内 電話 075-752-1617 振替 01000-2-27974</p>	<p>俳句の今日と明日と明後日を語り合う</p> <p>青山俳句工場05</p> <p>編集・発行 宮崎 斗士</p> <p>隔月刊 (通信句会、その他) 1号 (1回)につき2句出句 会費 (購読料含む) 5回 6,000円 10回 12,000円</p> <p>〒182-0036 調布市飛田給2-29-1-401 宮崎 斗士 方 電話 070-5555-1523 メール tosmiya@d1.dion.ne.jp</p>
<p>菜の花</p> <p>主宰・伊藤 政美</p> <p>雑誌出句 八句 誌代 一部一、〇〇〇円 半年六、〇〇〇円</p> <p>発行所 菜の花会 〒510-0942 四日市市東日野町一九八一―一 振替〇〇八七〇―一二七六六八</p>	<p>個性豊かに原郷樹林 (月刊)</p> <p>天籟通信 てんらいつうしん</p> <p>師系 穴井 太 代表 福本 弘明</p> <p>誌代 1部 1,000円 発行所 〒807-0827 北九州市八幡西区楠木2-6-12 天籟俳句会 Tel/Fax 093-602-6058 振替 01700-0-36440</p>	<p>自鳴鐘</p> <p>主宰 寺井 谷子</p> <p>雑誌出句 五句 誌代 1部 1000 円</p> <p>〒803-0825 福岡県北九州市小倉北区 白萩町 2-19</p> <p>自鳴鐘発行所 電話 093-561-1713 振替・福岡 4-16600</p>
<p>月刊 俳句通信紙</p> <p>こんちえると</p> <p>私と時代を想つめ 生きている証しを詠む</p> <p>師系 大牧 広 版元 牛歩書屋主人(関根 道豊) 主旨…俳句の詠みと読みの協奏 紙代…一年 六〇〇〇円 出句…雑誌一句 題詠一句(互選) 〒330-0804さいたま市大宮区堀の内町一六〇六 電話・FAX 〇四八―六四五―七九三〇 牛歩書屋</p>	<p>俳句と非懐紙連句と其角研究を</p> <p>詩あきんど 編集・発行 二上貴夫</p> <p>季刊(一年間)五〇〇〇円 見本誌+テキスト「型で俳句を」 (八四四円切手一〇枚をご郵送下さい) 〒257-0024 秦野市名古木一―七―一 FAX 〇四六三―八二六三―二五 メール kikaku@eeboo.jp H P http://kikaku.booo.jp/</p>	<p>主流</p> <p>代表 田中 陽</p> <p>口語俳句の研究と創作</p> <p>誌代 1部 1000 円(送料共) 会費 1年 6000 円(送料共)</p> <p>〒427-0053 島田市御飯屋町 8778 主流社 振替 00800-0-37863</p>

宇宙

『宇宙』には夢があり
明日がある。
主宰 島村 正

平成五年十一月創刊 師系 山口誓子
誌代 一、五〇〇円 一年 一、二、〇〇〇円
〒422-8032 静岡市駿河区有東一〇一八
「宇宙」発行所
電話 〇五四一二八二二三九五
FAX 〇五四一二八二二三三四二

海原

KAIGEN

金子兜太「海程」後継誌
代表 安西 篤
誌代(送料共) 1年 12,000円
【海原発行所】
〒272-0024 市川市稲荷木
2-14-9 武田伸一方
電話&FAX 047-377-7510
振替 00210-6-104855

圓座

誌代 一年 六〇〇〇円(隔月刊)

主宰 武藤紀子

〒467-0047 名古屋市瑞穂区日向町三六十六一五
電話 〇五二一八三三二二六八
武藤方 円座俳句会
振替 〇〇八七〇一一一四二九六七

青海波

創刊 齋藤 梅子
主宰 本城 佐和

誌代 半年 7800円
1年 15600円

〒770-0932
徳島市仲之町 2-8-2 本城方

青海波俳句会

電話 088-652-6730
振替 01650-5-4908

紫

創刊 関口比良男
主宰 山崎 十生

誌代/月額 1,000円

発行所
〒332-0015
川口市川口 5-11-33

紫の会

雪華

主宰 橋本喜夫

雑詠 出句 六句
会員年会費 8,400円(送料共)
発行所 〒078-8345
旭川市東光五条 6丁目1-22

雪華俳句会

FAX・電話 0166-34-4025
kakouton@potato6.hokkai.net
振替口座 02780-4-70865

ぬかるみ

選者 松本真津子

雑詠(白雲集)出句 七句
誌代 半年 6000円(送料共)
1年 12000円(送料共)

〒374-0036
群馬県館林市諏訪町
1427 松本方

ぬかるみ俳句会
振替 00380-3-4537

月刊誌

小熊座

主宰 高野ムツオ
師系 金子兜太・佐藤鬼房
人間風土の尊厳を思い詩性の昂揚を目指す。
誌代 一年 二、〇〇〇円 見本誌 一、〇〇〇円
〒985-10863
多賀城市東田中一四〇一二六五〇四
電話・FAX 〇二二三六四一六八五九
振替 〇二二〇〇三二一五二七二
小熊座発行所

四季

師系 松澤 昭
主幹 松澤雅世

同人集・雑詠 各七句
誌代 1部 1300円(送料共)
1年 7800円(送料共)
隔月刊

〒113-0022 東京都文京区
千駄木 5-48-4-201

四季会

振替 00150-8-56721
TEL/FAX 03-3827-1383

俳句雑誌案内

<p>連句&俳句 とらいあんぐる</p> <p>代表・高木 暢夫</p> <p>誌代…二年/六千円(季刊)</p> <p>出句…十句以内/連句投句自由 主旨…俳句と連句を共に楽しむ</p> <p>〒194 0204 町田市小山田桜台1-2-9 305 山崎 セツ子方 とらいあんぐる会</p> <p>TEL 〇四二七九七五八九六 〇〇六〇八五八七九〇 振替</p>	<p>自然・人生を優しく見つめあう輪</p> <p>八千草</p> <p>主 幸 山元志津香 副主宰 横川はつち</p> <p>誌代(季刊)一年 四〇〇〇円</p> <p>〒215-0006 川崎市麻生区金程四一九一八 八千草俳句会</p> <p>電話 〇四四一九五五一九八八六 〇〇二六〇一四一三九二六 振替</p>	<p>草 火</p> <p>主宰 久行 保徳</p> <p>同人作品五句 雑詠出句七句 誌代 1部 1000円(送料共) 1年 6000円(送料共) 隔月刊</p> <p>〒745-0825 周南市秋月 2-4-18 草炎俳句会</p> <p>振替 01500-4-3573 電話/FAX 0834-28-2344</p>
<p>夢</p> <p>師系 前田吐実男 主宰・龐 潤</p> <p>オンラインワンの俳句を目指す 年会費一万円 見本誌八〇〇円(切手で可) 雑詠出句三句 初心者歓迎</p> <p>〒248-0007 鎌倉市大町三二四一二十五 夢 発行 所</p> <p>電話 〇四六七一一三一四一七</p>	<p>顔</p> <p>名誉主宰・瀬戸 美代子 主 幸・川村 智香子</p> <p>誌代 半年 六〇〇〇円 常時会員募集中 HPは『顔俳句会』で検索ください。</p> <p>〒249-0001 逗子市久木 八一一九一四七 顔 俳 句 会</p> <p>電話・FAX 〇四六八八七二一〇三四二一 振替口座・〇〇二六〇一七一一五二〇五九</p>	<p>創刊 2001年8月! 月刊 平明清新・抒情・生活感覚 師系・古沢太徳</p> <p>鷗 座</p> <p>代表 松田ひろむ</p> <p>●会員募集中! 初心者歓迎! 見本誌無料進呈</p> <p>会費 月1000円、同人費月2000円 作品募集 雑詠鷗座 七句 松田ひろむ選</p> <p>〒174-0046 板橋区蓮根 3-12-27-110 松田方 鷗座俳句会</p> <p>郵便口座 00100-8-485671 TEL&FAX 03-3968-0153</p>
<p>虎 杖</p> <p>代表 松本 勇二</p> <p>季刊 雑詠7句 誌代 半年6000円 1年12000円 〒791-1106 松山市今在家1-6-32 虎杖発行所</p> <p>電話/FAX 089-958-6417 E-mail yuji81900727@yahoo.co.jp</p>	<p>山 河</p> <p>代表 山本 敏倅</p> <p>自分と俳句を自由に育てる会</p> <p>同人作品五句 雑詠五句(隔月) 会員費年間 8000円(送料共) 誌友 年間 6000円(購読料)</p> <p>〒116-0014 荒川区東日暮里 3-34-10 山本方 山河発行所</p> <p>電話 03-3801-1656</p>	<p>隔月刊 遊 牧</p> <p>名譽代表 塩野谷仁 代表 清水 伶</p> <p>誌代 一年 六、〇〇〇円(送料共) 〒290-0003 市原市辰巳台東五三二一六 大西方 遊牧俳句会</p> <p>電話 〇四三六一七四一五三四四 〇〇一一〇一一一一八〇七一 振替</p> <p>兜太俳句の真髄を継承する</p>

俳句雑誌案内

<p>誌代(季刊)年 三〇〇〇円 〒538-0007 大阪府泉佐野市上町 二六三八二〇一 香天の会</p> <p>FAX 〇六七六二二五七八二一 メール okada57@gnai1.com 振替 〇〇九七〇一六一二二五四六八</p> <p>香天</p> <p>師系・鈴木六林男 代表・岡田耕治</p>	<p>蝶</p> <p>代表 味元昭次</p> <p>雑詠7句 初心者歓迎 年間会費 5000円(隔月刊) 発行所 〒789-1201 高知県高岡郡佐川町甲1620-8 電話 0889-22-4114 振替口座 01680-7-69384</p> <p>蝶俳句会</p>	<p>新人の育成と個性の開花 (新会員募集)</p> <p>山彦</p> <p>主宰 河村 正浩</p> <p>誌代 半年 2500円 1年 5000円</p> <p>〒744-0024 下松市花岡大黒町 526-3</p> <p>山彦俳句会 振替 01360-6-95793</p>
<p>師系 齊藤美規</p> <p>〒939-0731 富山県下新川郡朝日町 東草野一八〇三一〇八九〇 電話 〇七六五一八三一〇八九〇 振替 〇〇七五〇一八一九四九八三</p> <p>森</p> <p>主宰 森野稔</p> <p>誌代 年会費 一五〇〇円</p>	<p>かまつか</p> <p>主宰 行川 行人</p> <p>誌代 1年 9600円(送料共)</p> <p>〒177-0044 東京都練馬区上石神井 3-27-29</p> <p>かまつか俳句会 電話 03-3928-0922 振替 00270-7-37774</p>	<p>暁</p> <p>「青玄」後継誌 隔月刊 代表 桑田 和子 初心者歓迎</p> <p>会費 半年六、〇〇〇円 一年二二、〇〇〇円 〒561-0861 豊中市東泉丘一五―三―三〇三 桑田和子方 暁俳句会</p> <p>電話・FAX 〇六一六八四九―二五七四 振替口座 〇〇九三〇一七―三二八二二三三</p>
<p>皆様の個性溢れる俳誌</p> <p>Romanée-Conti</p> <p>代表 播磨穹鷹</p> <p>同人会長 永井 潮 総務 中村光影子 運営 松原 君代</p> <p>月刊誌 毎月五句 誌代¥1,000 〒671-2577 TEL0790-62-0737 兵庫県宍粟市山崎町山崎317 ロマネコンテ俳句ソシエテ ぱ・る・る 14380-59467381 romanee7@eos.ocn.ne.jp</p>	<p>隔月刊</p> <p>朱夏</p> <p>師系 金子兜大 主宰 酒井弘司</p> <p>誌代 1年間 6000円(送料共) 発行所 〒252-0153 相模原市緑区根小屋 2739-149 朱夏俳句会</p> <p>電話・FAX 042-784-4789 振替 00230-2-78527</p>	<p>月刊 地貌をからだ感覚を通してうたう</p> <p>岳</p> <p>編集長 宮坂 静生 小林 貴子</p> <p>会費 半年 七二〇〇円 一年 一四四〇〇円 事務所(見本誌申込み) 〒390-0811 松本市中央二―一―一二二 振替 〇〇五九〇一七六二六 電話 〇二六三三六―四六四六</p> <p>岳俳句会</p>

第十五回「現代俳句の風」作品募集（掲載料無し）

「現代俳句の風」は、会員の交流欄です。協会会員の皆様は、どなたでも、投稿した句は全て掲載されます。（購読会員の方は協会会員になってから、ご投稿ください。）

★ 十二月号に綴込みの投稿ハガキをお使いください。

① 最近一年間の作品から四季各一句をご記入下さい。

無季句は、その書かれている欄の季に掲載します。

② お使いの「表記」について、該当する番号（１・旧仮名）・（２・新かな）を丸で囲んでください。

③ ご自分の俳号（無いときは本名）、所属地区、電話番号、所属俳誌を、ご記入ください。

④ 八十四円切手を必ずお貼りください。

★ ご意見ご感想も、歓迎いたします。

★ あなたの句とお名前の載ることが、協会の元気に通じます。

★掲載は、来年六月号から、順次始まります。

次のように、夏、秋、冬、春の順で、必ず掲載されます。

六、七、八月号のいずれかに夏の句
九、十、十一月号のいずれかに秋の句
十二、一、二月号のいずれかに冬の句
三、四、五月号のいずれかに春の句

会員誌『現代俳句』誌では、毎号の「現代俳句の風」秀句を探るのコーナーで、仲間の会員の方から、感銘句として、あなたの一句が選ばれるチャンスがあります。

締切は、一月二十日です。皆様のご投稿をお待ちしています。

『現代俳句』編集部

現代俳句

令和四年(2022年)十二月一日発行

通巻六八四号

毎月一回一日発行



頒価 六〇〇円